



KYU 九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University



令和元(2019)年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」
「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会
編集:緒方 泉(委員長・九州産業大学地域共創学部教授)
デザイン:小野 勝也(有限会社 フォース)
発行日:2020年3月30日
印刷:東洋紙業高速印刷株式会社



博物館が、人を育てる。

museum

令和元年度 文化庁
「大学における文化芸術推進事業」
実施報告書



「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」の構築に向けた博物館マネジメント人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、
田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館)

本事業のねらい・趣旨

現在、団塊世代が75才以上となる2025年を目途に、要介護状態になっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれる。そこで本事業は、博物館において高齢者の居場所と出番を創出していくために、これらが実現可能な人材を育成し、全国に約5,700館ある博物館が地域包括ケアシステムの新たな拠点「博物館健康ステーション」を担っていくことを目指す。このため、具体的には「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」をいち早く進める米国・英国の博物

館調査を基に、博物館関係者を対象とした技術研修とともに、芸術療法・音楽療法・園芸療法・アニマルセラピー・回想法等を取り入れた研修会を実施する。また、九州産業大学（文化芸術、地域づくり、教育、スポーツ健康科学分野の連携）を中心に地域博物館、医療・福祉機関との連携による新たな博物館マネジメント方策についても、効果評価測定法の開発（プログラム効果のエビデンスを「つくって」「つたえて」「つかう」というプロセスの研究を通じて実施）と合わせて、提案していきたい。

本事業の実施概要

1. 博物館マネジメント人材育成研修会の実施（展示制作、展示グラフィック、資料保存等の技術研修＝ミュージアム/テクニカルコースとともに、「記憶」に残る博物館資料を活用した芸術療法、音楽療法、園芸療法等の介護予防プログラム研修＝ミュージアム/セラピーコースを実施する）
2. 博物館健康ステーションの開設（地域の高齢者を対象に、研修会修了生が企画立案するミュージアムカフェを開催し、高齢者の博物館における居場所づくりを進める）
3. 子ども博物館教室の運営（ミュージアムカフェに参加する高齢者を指導者とする地域の子ども（外国人住民を含む）向け講座を開設し、高齢者の出番、そして交流の場を創出する）
4. 多言語学習教材の開発（高齢者に馴染み深い博物館資料の正しい守り方、見せ方を学ぶための学習教材を作成することで、現職学芸員・休職学芸員の研修での活用、さらに外国人住民、訪日外国人に向けた日本文化や博物館バックヤード紹介教材として活用する）
5. 「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める米国・英国博物館との交流事業（米国・英国の博物館で実施される後期高齢者、認知症高齢者に対する先進事例を継続調査する。特に効果評価測定法の聞き取りを重視し、今後の博物館マネジメント方策を研究する）
6. 米国・英国博物館関係者を招聘した国際シンポジウムの実施（東京五輪文化プログラムの取組みとする）
7. 日本の博物館における高齢者向け教育プログラム悉皆調査の実施（昨年度の九州・沖縄地域へのアンケート調査をもとに、悉皆調査を実施する）
8. 博物館マネジメント人材育成事業実行委員会の開催（実行委員会に次の3部会を設ける。①調査研究部会、②プログラム開発・評価検討部会、③教材開発部会）

本事業による人材育成の目標

博物館が高齢者の居場所と出番を創出していくためには、現職学芸員や学芸員有資格者（休職学芸員）及び博物館関係者が、これまで以上に保存管理、展示教育等のスキルをアップしていくことはもちろんのこと、特に「記憶」に残る博物館資料を活用した各種療法を学ぶことが重要になってくる。このため本事業では、美術館で芸術療法、歴史民俗博物館で回想法、動物園や水族館でアニマルセラピー、植物園で園芸療法などを学ぶ機会を提供し、それぞれの博

物館で介護予防や生活支援等の新たな博物館の価値を創造し得るマネジメント人材の育成を行う。また、現在博物館に従事していない学芸員（いわゆる休職学芸員）についても育成対象とし、博物館が地域課題を解決する場として社会的な役割を獲得するために、広く啓発を図りたい。こうしたことから、平成30年度以上に洗練化されたマネジメント人材の育成に努めたい。

本事業の社会的な役割、効果

博物館は地域の文化財を保存管理、調査研究し、展示公開する場所であり、地域の「記憶」を集積する場でもある。しかし、近年の社会教育調査では「国民の博物館利用は年1回程度」というデータがある。また、2020年の東京五輪開催に伴い、多くの訪日外国人が博物館を訪問すると予想されるが、地域博物館までその影響を受けられるかどうかは

期待できない。従って、今回実施する事業により、文化庁「文化芸術推進基本計画」（平成30年3月）が示す「博物館が地域課題を解決する場」として社会的な役割を獲得し、「医療・福祉のよりよい関係づくり」を推進することで、地域包括ケアシステムの内、予防や生活支援で博物館の活用の幅を広げる効果＝新たな博物館マネジメントの提案が期待できる。

組織体制

実行委員会名簿

委員長 緒方 泉（九州産業大学地域共創学部・教授）
副委員長 三島美佐子（九州大学総合研究博物館・准教授）
委員 朝鳥 和美（田川市石炭・歴史博物館・学芸員）
委員 市川 靖子（直方谷尾美術館・学芸員）
委員 鬼本佳代子（福岡市美術館・主任学芸員）
委員 松村 利規（福岡市博物館・学芸課長）
委員 塚田仁次（海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部海洋動物課係長）

事務局名簿

事務局長 中込 潤（九州産業大学美術館・学芸室長）
事務局次長 永井 浩一（九州産業大学産学連携支援室・課長）
事務局員 林田 純一（九州産業大学産学連携支援室・室員）
事務局員 吉田 公子（九州産業大学美術館・准教授）
事務局員 門井 慶介（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員 三戸 丈治（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員 四ヶ所 悦子（九州産業大学産学連携支援室・室員）

学芸員技術研修会スケジュール

番号	研修内容・開催日	開催場所	講師
①	展示制作 2019年6月26日(水)	都城市立美術館	洪 恒夫 (東京大学総合研究博物館)
②	展示グラフィック 2019年7月1日(月)	長崎県美術館	熊谷 淳一 (株式会社ノイエ)
③	著作権 2019年7月31日(水)	鹿児島市立美術館	福井 健策 (弁護士、日本大学芸術学部)
④	資料保存 2019年8月26日(月)	くまもと文学・歴史館	木川 りか (九州国立博物館)
⑤	梱包技術 2019年10月11日(金)	佐賀県立博物館・美術館	ヤマトグローバル ロジスティクスジャパン(株) 九州美術品支店社員
⑥	博物館教育 2019年11月18日(月)	福岡市美術館	齊 正弘 (美術家、元宮城県美術館)
⑦	照明技術 2019年11月25日(月)・11月26日(火)	大分県立 埋蔵文化財センター	藤原 工 (株式会社灯工舎)
⑧	ユニバーサル・ミュージアム 2020年1月27日(月)	沖縄市立郷土博物館	広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館)

令和元(2019)年度学芸員技術研修会日程一覧表

Contents

1 本事業のねらい・趣旨	01
2 本事業の実施概要	01
3 本事業による人材育成の目標	01
4 本事業の社会的な役割・効果	02
5 組織体制	02
6 学芸員技術研修会スケジュール	02
7 ① 展示制作	03
② 展示グラフィック	05
③ 著作権	07
④ 資料保存	09
⑤ 梱包技術	11
⑥ 博物館教育	13
⑦ 照明技術	15
⑧ ユニバーサル・ミュージアム	17
8 連続講座	
① 動物園 de アニマル・セラピー	19
② 美術館 de 音楽療法	20
③ 庭園・美術館 de 園芸療法	21
④ 博物館 de 回想法	22
9 ミュージアム・カフェ事業	23
10 子ども博物館教室事業	24
11 多言語学習教材開発事業	24
12 「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める米国・英国博物館との交流事業	
米国調査	25
英国調査	33
13 米国・英国博物館関係者を招聘した国際シンポジウム事業	38
14 日本の博物館における高齢者向け教育プログラム悉皆調査事業	41
15 印刷物	42

博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
[学芸員技術研修会]

①「展示制作」

■ テーマ

「テーマは決まり、作品リストも固まったけれど、さあこれらをどう展示しようか？」と毎回思案する学芸員も多いと思います。今回は都城市立美術館の展覧会を事例に、「展覧会の作り方」を講義、グループワークを通じて学びます。

■ 講師

洪 恒夫（東京大学総合研究博物館特任教授）

■ 開催日時

2019年6月26日(水)10:00～17:00(9:30～受付開始)

■ 開催場所

都城市立美術館（宮崎県都城市姫城町7-18）

■ 内容

10:00 自己紹介、「展示制作」の悩みの共有 10:30 報告「展覧会の作り方-都城市立美術館を事例として-」(西田茉未学芸員) 11:10 「収蔵作品展 新しい物語のはじまり2019」会場見学(西田茉未学芸員) 12:00 昼食 12:50 グループワーク①「展示制作のココはいいなあ【I like】、ココはこうしたいなあ【I wish】というポイントを検証する」 13:20 グループ発表 14:20 講義「展覧会の作り方」で留意したいこと(洪恒夫先生) 15:10 休憩 15:25 グループワーク②「もう一度展覧会を見てみよう」 16:05 グループワーク③「講義・グループワークを通じた疑問をまとめ、質問してみよう」 16:35 グループワーク④「今日は意味のある時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

26名(宮崎18名、鹿児島5名、福岡2名、長崎1名、東京1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で洪先生の講義から学んだことは何ですか？

●展示することは「もてなすこと」である。また、展示の効果として見る側に驚き・発見・共感・納得が得られることが重要であるということが新たな気づきでした。そのため紐付けした展示の仕方など、実際の展示を見ながら学ぶことができました。

●いい展示は、知性と感性のゆさぶりであり、コミュニケーションメディアの一つである。それは「もてなす」こと。という言葉が印象的でした。

●①展示をメディアと捉え、展示作品が同じでも「見せ方(見せびらかし方)」によって展覧会の質が変わること ②空間的・立体的に考えること ③展覧会のミッション・コンセプトを明確にし、チームで共有することの大切さ。

●第一に、企画に際し、鑑賞者の立場にも立つということ。そして「楽しませる」という視点。洪先生のお話は、博物学的な分野が主でしたが、学術理論を展示でうまく示していく方法は全体の流れを系統的に組み込んでいくという上で大変参考になりました。

●①ファーストインプレッションの大切さ。→視線がどう移っていくかを考慮し展示をする ②ミッションの設定とコンセプトを明確にし、かつ関係者で共有する ③展示は料理と共通点がある。スパイスの大切さ。見せ方で大きく変わる ④レイヤーを用いた空間表現 ⑤見た人が驚き、発見、共感、納得を得られる展示を考える ⑥展

示はもてなし。

●チームで展示する際に大切な3つのことを学びました。①展示のコンセプトを明確化する ②キーワードに置き換える ③迷った時は①のコンセプトに合致しているかを判断材料にする。コンセプトについては、もっと時間をかけて話し合おうと思いました。

質問2

今後展覧会を企画するに当たり、都城市立美術館の展覧会「新しい時代のはじまり2019」を事例にしたワークショップから活かしてみたいことは何ですか？

●各部屋で統一性を持たせ、かつテーマが上手に切り替えていたことや、展示品の間取り方を考えさせられました。又、部屋のテーマ、パネル、展示品に関連性を持たせる事に留意していきたいと思いました。

●展覧会を魅力的にするには、展覧会場の入口から「驚きの展示」を企画し、それを展覧会全体の導入部として使い、会場の出口の展示まで緊張感のある納得できる内容にすること。

●展示に困った時は「何を伝えたいのか」に立ち戻ること。今後は活かしたい。

●来館者の視点に立った、魅力ある展示の方法、作品の世界観に集中できるようにするために、配置や空間の取り方、キャプションの見せ方など、細部まで気を抜かず作り込んでいくことを活かしてみたいと思いました。

●展覧会全体の構成(章立て)を考え、構成する。境界の置き方、導線・作品数を引き算することも必要。空間にメリハリをつけること。また、自館でも職員同士でI wish, I likeをディスカッションする機会を作れたらと思います。

●企画者は「お客様にどう見てもらいたいのか?何を伝えたいのか?」をじっくり考えることが非常に重要だと感じました。苦しくてそこをサボらず、企画を作っていくと思いました。

●まず、自分で制作した展示をまっさらな目と複数の人で見るのが大事だと改めて考えました。自分たち図書館の展示に活かせるのは、以下の2つが大きくあります。①ディテールを揃えることによる、展示空間の緊張感を生むこと ②椅子や立体物など、空間に配置する物の位置によって、来館者の視線や導線を促すラインを生み出すこと。これらのことを念頭に置いて展示空間を制作することで、図書館という入場フリーな場所での展示においても、「鑑賞する」というモードに鑑賞者を促すことができるのではないかと考えました。

質問3

今後、他館の展覧会を見学する時に、どんなところに注目したいと思いますか？

●他ジャンルの展示も積極的に勉強していきたい。

●部屋に入りまず、何が目に入るか、その後の動線にどのように気を配っているかを注目したいと思います。

●①作品が、展覧会のテーマに沿って、見やすい順番と位置に並べてあるか ②作品が、それぞれの個性を主張しつつ、会場全体を美しく調和するように展示されているかに注目したい。

●展示のコンセプトやおもてなしポイントはどこなのか?に注目したい。

●作品単体を見るだけでなく、隣り合うまたは近くの作品同士の関係性についても注目したい。

●全体を貫くコンセプトは何かということと、イメージを統一するために工夫されている、さまざまなデザインについて注目してみたいです。

●学芸員の意図はどこにあるのか、また、I wish, I likeを考え「自分だったらどうするか」を意識したいと思いました。

●順路や誘導も含めて、その展覧会のイメージを大切にしたい展示方法であるかに注目したいです。

●企画者の意図が汲み取れるか。どこに「緊張感」があるか。展示をする側が見てほしい作品はどれか、そのためどのような導線や構成をしているかを考えながら見たいと思います。新しい展示の見方が増えました。

●企画者の意図が汲み取れるか。どこに「緊張感」があるか。

●各部屋の入り口や、その空間のモノの配置・光の当たり方などに注目したいと思います。そこに注目することで、学芸員の考えやねらいを読み取ると同時に、展示の主旨の理解にも繋がると考えます。また、実際に主旨に対応して、作品やキャプションの展示方法を選択したのかを見て感じるができると思います。



博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

②「展示グラフィック」

■ テーマ

最近ではポスター、チラシ等広報物を、予算の関係から学芸員が行うことが多くなっています。今回は、視覚伝達効果が高い広報物を制作するための「キャッチコピー」「文字の配置・大きさ・フォント」「配色」「紙面構成」等について学びます。

■ 講師

熊谷 淳一（株式会社ノイエ代表取締役）

■ 開催日時

2019年7月1日(月)10:00～17:00(9:30～受付開始)

■ 開催場所

長崎県美術館（長崎県長崎市出島町2-1）

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 グループワーク①「他館のチラシデザインの相互評価」 11:00 講義①「チラシ作りの基礎<チラシの4つの重要要素>」 12:10 昼食 13:00 グループワーク②「チラシの改善点を話し合う」 13:15 グループ発表「チラシの改善点を説明する」 14:00 講義②「チラシデザインとキャッチコピーの基本技術」 14:50 休憩 講義③「展示パネル制作の基本技術」 15:55 休憩 16:05 グループワーク③「講義・グループワークを通じた疑問をまとめ、質問してみよう」 16:35 グループワーク④「今日は意味のある時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

29名(長崎16名、福岡8名、大分3名、佐賀1名、鹿児島1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で熊谷先生の講義、演習(ラフ案作成)から学んだことは何ですか？

● 情報を受け取る側にとって何がメリットなのか、が肝であるということ。「あなたの生活の質を上げるのに役立ちます」というアプローチが中心に来ること。広報物の制作において、その原則に立ち返る仕組みを作っておかないと、慣れてくるほどに、ついつい自分の作りやすいように作ってしまうと痛感しました。

● お客様・見る人にとって、チラシがその人にどのようなメリットがあるかという事をまず考えて作成しなければならない事です。表面に重要な情報を入れ、出し惜しみしない事が大切だと分かりました。

● 当たり前だと感じていた、いわゆる「展覧会チラシ(表面にタイトル日付、裏面に詳細・大事なこと)」に改善の余地が大いにあるという事実と向き合えたことが大きな収穫です。

● テキストのトラッキングの例や、照度による見え方の違いなど大変興味深かったです。講師の用意した例ではなく、参加者の持ち寄りのチラシをベースに議論でき、具体的な話ができたのがとても勉強になりました。

● チラシを作るにあたって、参加するメリットを提示する、そして、集客対象としてピラミッドで図示された集客ツールは真中の「どちらでもない80%」の人に向けて作成するというお話が、とても印象的でした。これまで作ってきたチラシは、ただ、日時と場所がわかればいい・・・と、そのことばかりに気を取られて、先生のお話にあったピラミッドの頂上である、そもそも興味のある人向

けに作っていたように思います。文字のフォントや写真、イラストの配置ばかりに目が行っていましたが、何を伝えたいのか、もっと考えて作成するきっかけとなりました。

● センスがなくても、チラシを制作するための4つの要素「メリット」「コピー」「デザイン」「個性」をおさえることで、集客につながるチラシを作ることができると学びました。

質問2

今回の「展示グラフィック」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の印刷物、解説パネル、キャプション等の展示グラフィックで注目したいポイントは何ですか？

● 読んでもらうための配慮(行の長さ、行送り等)がなされているかどうか。メリハリが効いているかどうか。

● 来館者のメリットが記されているかどうか、それが伝わるようなデザインが考えられているかどうか、来館者の視線を意識して作られているかどうか、といった点に注目したいと思います。

● 徹底的に「見る側・読む側」の立場に立てているかどうかを、今後の評価軸にしていきます。

● 今までどのような基準で判断してよいか分からなかったですが、先生のキャプションの手直し前と後を比べ、デザインもまとまっていて、情報がすっと頭に入ってきたのが実感できました。文字の種類や大きさ、配列だけでも、お客さんの興味を引くことが出来るので、今後ぜひこのような技術を身につけたいと思います。

● 「メリットは何か？」を問うことを、今後意識的にしてみたいと思うようになりました。人々が出かけていく理由、動機や魅力、そしてメリットが明記してあるかという視点で、世の中の展示グラフィックを見つめ直してみたいです。

● 他館のチラシを見た際に、制作側はデメリットだと思い、あえて隠そうとしていたことが、他者から見ると魅力的なメリットと感ずることがあった。自分たちにも同じことがあてはまる場合があるかもしれません。他館がメリットをどのように発信しているか、他との差別化をどのように表現しているか等、注目していきます。

質問3

評価シートやマトリックスは今後どのように活用したいですか？

● 自身で作成する時はもちろん、他の館のチラシ、パネル等を見る際にも、評価することによって学びたい。

● マトリックスは、非常にユニークでした。今後自館の情報コーナーにあるチラシを今までと違う見方ができると思います。

● パネルやキャプションの作成で早速使用しています。今後、ポスターやチラシを作成する際にも活用したいです。

● イベントやワークショップのチラシなどを作成する際に、本当に効果的なチラシか、展示グラフィックかどうかということを検証するための指標として、活用したいです。

● チラシ作成の際、センスや好みで決めてしまわないよう活用していきたいです。

● 評価シートにある「メリット」「コピー」「デザイン」「個性」の4つの観点を参考にしながら、チラシの作成を進めていきたいと思います。また、作成したものを「チラシのチェックポイント」を参考に修正し、より相手の心を動かすチラシ作りを心掛けたいです。学内研究所からイベントチラシの作成依頼があった際には、「仕様書作成にあたってのチェックシート」をもとにデザイン案のすり合わせをすれば、方向性が決まって作成しやすくなりそうだと思います。図書館に貼られているポスターに関しても、日頃から4つの観点で眺め、参考にしたいものはファイルに残そうと思います。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあとと思う点があればお書きください。

● 学芸員技術研修会という事で、内容が高度すぎてついていけないのではないかと不安でしたが、実際には図書館や水族館など多種多様な施設の方が参加されていてホッとしました。講義も大変わかりやすく要点がまとめられていて、自館の改善点などがはっきりと理解できたのでとてもよかったです。

● これまで、チラシの案をチェックする際、誤字脱字、わかりやすいかどうかという視点でしか見ることができなかったが、専門的なチェックの仕方、根拠などを学ぶことができて良かった。利用者へのメリットの提示については、今後の仕事の中で重要なことであり、常に頭においておくべきことと思った。講師の先生の説明も資料等もわかりやすく、班の方の館の話も聞くことができ、とても充実した一日だった。

● 美術館、博物館だけでなく、図書館・大学関係者など様々な方と悩みを共有できた点はよかったです。自分たちのことを客観視するよい契機となりました。また、これだけイベントや展覧会が乱立する今日において、心をつかみ行動を起こさせる・・・とても難しいですが、マーケティングについても改めて勉強して仕事に生かしていきたいと気持ちが高まりました。



博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

③「著作権」

■ テーマ

「どんな情報が著作権で守られるのか?」「どんな利用に著作権は及ぶのか?」「何処まで似れば侵害なのか?」「PD(パブリック・ドメイン)とは?」など。日ごろ文化芸術・教育に関係する皆さんが悩まれている著作権に関する考え方、対応法を学びます。

■ 講師

福井 健策(弁護士、ニューヨーク州弁護士、日本大学芸術学部客員教授)

■ 開催日時

2019年7月31日(水)13:00~17:00(12:30~受付開始)

■ 開催場所

鹿児島市立美術館(鹿児島県鹿児島市城山町4-36)

■ 内容

13:00 開会行事 13:15 講義①「どんな情報が著作権で守られるのか」「どんな利用に著作権が及ぶのか」
14:15 休憩 15:15 講義②「著作権の限界」「アーカイブの挑戦と権利の壁」 15:30 演習①「皆さんからの質問に答える(事前アンケートを基に)」 16:00 休憩
16:15 演習②「本日の講義に関する質疑応答」 17:00 終了

■ 受講者数

31名(鹿児島22名、宮崎4名、福岡3名、熊本2名、沖縄1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で福井先生の講義から学んだことは何ですか?

● 著作権活用の不自由さを感じていたが、作家・作者

を守りための権利として無くてはならないものであることを再認識できた。また、著作権の及ぶ範囲や商標権との違いが明確になり、今後の仕事に即役立つ内容であった。

● 著作物の概念が「思想・感情を創作的に表現したもの」であるということが明確になり、それに基づく、実際の判例なども知ることで、今後の活動に活かせると感じました。著作権はすべての人にあるということ。扱う情報の資料を、より丁寧に扱うことができそうです。

● 研修の冒頭で示された「著作権とは“創作的”な“表現”」という言い方がとても分かりやすく、自館に戻ってから同僚に同じように伝えていきます。著作権法の基本や近年の改正点だけでなく、著作権の保護・侵害など、具体的な内容が多かったのが印象的でした。また、著作権法の動向を常に追う必要があると感じています。

● 著作権については何となくこういうものだろうという意識はあったつもりだが、講義を受けて基本的な知識すらなかったのだと愕然とした。同時に自分が意図していないところで著作権を侵害するに値する行動を起こしている可能性があり、知識がなかったとしてもその問題にどのように向き合うべきか非常に参考になった。著作権侵害の事例がいくつか紹介されたが、こんなことが?という例ばかりで驚いた。

● 著作権は何に生じるのか、著作権が及ばない情報とは何かといった、基本的なこと。美術館においては、個人の楽しみのための写真撮影であっても、管理者としての権限で規制をかけているという事実。著作権の保護期間など、具体的な事例を通して学ぶことができました。

質問2

今回の研修会を受けて、今後、自館はもちろん、他館そして団体、個人の活動で気をつけたい著作権のポイントは何かですか?

● 発注者側が注文して作成した印刷物などは、業者側に著作権が発生していることを知りました。今後は、館の研究紀要やポスター・チラシなどを発注する際に、仕様書に著作権の帰属を明記するようにしていきたいと考えています。その他、HPなどにおける新聞社や雑誌の記事の紹介や音楽など、著作権に留意していきたいと思います。

● 図書館では著作権を保護という観点でとらえることが多いのですが、活用という点からも見直していきたいと思います。資料を使うことができない基準だけを考えるのではなく、保存と活用についても考えて、著作物のよりよい利用法を提示していきたいです。

● 自館はもちろん、他館の展覧会やイベント等で撮影可能な箇所がある場合、その根拠は何なのかを意識しながら見ていきたい。

● 今後気を付けたい点は、著作物が関係するワークショップ等です。講義でもありましたが、材料費としてワークショップ参加料をいただくことがあります。この時が、著作権の範囲に入っているのか、十分注意していきたいと思います。(先生はグレーゾーンとおっしゃっていましたが)

● 勤務先の文学館では、書簡や個人メモなどの所蔵も多いため、今回レジュメにもあった引用も含めて、公開や活用には十分注意を払いたい。逆に考えると、法的にも道義的にも然るべき手順を踏むことで、多くの人に資料を広く公開、活用できるということなので、今回の学びや今後勉強を重ねることで、積極的に資料を活かしていきたいという気持ちになっています。

● 企画展など、外部の協力を得て作り上げることも多々あるので、後々トラブルにならないよう細かいところまで話し合い、互いに確認し合い、進めていかなければならないと感じた。分担作業も多いので、予め職員全員が写真やイラスト等の著作権の有無や相手方との決め事を周知しておかなければならない。又、SNS等で手軽に情報が手に入る時代なので、当館が持つべき著作権の確認や対策の必要性を感じた。

● 著作権侵害に当たる行動はこういったものがあるのかを把握し、著作権に配慮して行動していくことと、日々更新されていく情報をつかんでおくべきであると感じました。

質問3

今回の研修会について参加してよかったなと思う点があればお書きください。

● 司書がない当館(文学館)で複写サービスを行ってもよいものか。

*研修会後に著作権法を確認。複写の実施主体は「司書またはこれに相当する者」規定されており、「相当する者」とは文化庁の研修受講者であったので、学芸員しかない当館では、複写サービスはできないのではないかと考えた次第です。

● 私は美術館で働いており、観覧者への解説・紹介の為にweb掲載OKとお聞きし、良かったと思いましたが、後々どのぐらいの作品画像の掲載(大きさや文章の長さなどボーダーライン)が気になりました。

● 自館で無料配布するブックリストに書影(本の表紙)を載せ、そのすぐ横に200文字ほどの本の紹介文と書誌情報(出典)を入れています。この場合の書影利用は「引用」にあたりますか。現在は「版元ドットコム」掲載や許諾不要の出版社の書影はそのまま使い、出版社の求めがあれば許諾をとるようにしています。

● 遺族人格権がどのようなものか、ご教示いただければありがたいです。戦時中に撮影された戦死者の遺影や遺書・手紙などの遺品の著作権は切れていると思われるのですが、取扱いに際しては遺族人格権が存在するということでしょうか。関連して、戦死者の個人情報については、保護の対象にはなっていないとしても、遺族人格権のように取扱いに留意しなければならないと解釈したほうがよいでしょうか。

● 日本と欧米の二次創作(パロディ)の違いについて、事例を見ながらさらに詳しく知りたい。

● 一般の方はこれぐらいは、という認識が多いので、著作権があるということを知っていただくためにも、他の職員間で共通認識を持ちながら取り組んでいくことが大切であると感じています。様々な事案について、きちんと関係機関にも確認も行いながら進めていきたいと思っています。

● 今回は、商標登録に関して、少しお話していただいたので、著作権との違いをより深く知りたくなりました。



博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

④ 「資料保存」

■ テーマ

「科学の力、人力で博物館資料を守る」をテーマに、「展示環境、収蔵環境では何に気をつけたらよいか」「光、汚染物質、虫、カビにどう対処するのか」「災害時にどう対応するか」などを木川先生の講義とくまもと文学・歴史館の取り組みから学びます。

■ 講師

木川 りか (九州国立博物館学芸部博物館科学課長)

■ 開催日時

2019年8月26日(月)13:00~17:00 (12:30~受付開始)

■ 開催場所

くまもと文学・歴史館(熊本県熊本市中央区出水2-5-1)

■ 内容

13:00 自己紹介、「資料保存」の悩みの共有 13:30 講義「科学の力と人力で博物館資料を守る」 15:00 休憩 15:15 報告「くまもと文学・歴史館の資料保存取り組み事例の紹介」 15:35 演習「各館の資料保存取り組み事例を木川先生が解説する」 16:25 グループワーク「講義・演習を通じた疑問をまとめ、質問してみよう」 17:00 終了

■ 受講者数

37名(熊本22名、福岡7名、大分3名、宮崎2名、鹿児島1名、佐賀1名、長崎1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で木川先生の講義から学んだことは何ですか?

●資料保存において、何か起こってからではなく、予防が大事だということが分かりました。日頃から、資料の保存環境のチェックや、掃除等で虫やカビの発生を防ぐことが大事だと思いました。

●自館、他館所有の区別なく、過去から未来への「預かりもの」として資料一つ一つを大切に扱うことを学びました。公開することで地域や利用者の皆さまと一緒に、「大切なもの」として共感、共有できる。それが次世代継承へと繋がる。そのためにはIPM等、全職員の共通認識が必要とされる。コミュニケーションを密にし、会議等でも継続してアピールしていくなど。また保存方法も技術の進歩や、環境保全のため法律等の変更に合わせて、日々出来ることから工夫することを学びました。

●博物館で取り扱う資料や遺物は、自館が所有しているものでも、「お預かりしている文化財」という意識が大切であると思いました。その文化財をどのように保存・管理するかということを念頭に、私たちは行動しなければならぬと思いました。まずは、掃除を徹底し、虫が入ってこないようにすることです。次に、温湿度の管理を徹底することです。各博物館で施設の設備は違いますが、自館でできる取組みを工夫することが必要です。最後に虫やカビが発生した時の早急な対応。これらを行う上で最も重要なことが、各部署の人間の共通認識を持つことだと学びました。

●理論と実践です。初めて学ぶ事柄も多く、断片的にもっていた知識や習慣として行っていたことは理論として裏付けされ、多くの事例を通じて実践的な面も学ぶことができました。また、九州国立博物館などの大きな館では状況が大きく違うと思い込んでいたのですが(もち

ろん真似することが難しい点は多くありますが)、どの館も日々壁に当たっていて、人力による不断の努力で資料保存を行っていくしかない、ということに改めて気づかされました。そして、資料に対する自分自身の考え方や姿勢を改めて考える機会にもなり、未然に防ぐ、ということの日々意識して取り組んでいきたいです。

●これまで、IPMについて専門家などの話を聞いたことがなく、断片的な情報しか知らなかったため、新しい発見の多い講義でした。特に、資料の燻蒸について薬剤を用いないいくつかの方法があること、展示室や収蔵庫で保管している巻きダンボールなどは、文化財害虫の格好の餌であるということには驚きました。言われてみれば、ダンボールなので確かにと思うのですが、よく使用する梱包材でもあるので、考えを改める必要があったと感じました。今回の講義を受けるまで、IPMについては、専門的な知識を学んでから実際に行動に移すという、なんだか大変なことが多いという印象でしたが、身近な心がけ一つですぐに取り組めること、自分一人だけでなく全員で一緒に取り組むことが大事なのだということを感じさせていただきました。

●木川先生の講義から、「ただ闇雲に対策をしても意味が無い」ということと、「敵(虫やカビ)について、よく知ること」が大事であるということを学びました。

質問2

今回の研修会で、美術館、図書館からの質問コーナー(事前に受け付けた質問に木川先生が答える)を設けました。木川先生の回答から気づいたことがあればお書きください。

●作業室(道具置き場も兼ねる)の片付けを行い、掃除がしやすくカビ等の発生しにくい環境を作りたいと思います。

●自館(公民館図書室)で気になる点は、事例紹介があった図書館と同様でした。まずはスタッフ(嘱託2人)共通認識をもった上で、①室内整理:カウンター及び事務側の段ボール等の撤去。既に6割処理済み。②清掃の徹底:隅々まで日、週、月単位で行う。内容は後日検討。壁際や下方、角に留意。③窓の遮光ブラインドが半壊している(購入申請済、予算上未定)ため、当面の目標として替わるものを検討。9月末にシステム変更で長期閉館となるため、その際に検討、試作してみる。以上の取り組みを行いたいと思っています。また並行して事務所にもアピールしていきたいと思っています。

●当館では、収蔵庫内のみしか、インジケーターで害虫等の発生を確認していないので、エントランスや展示室

については、特に夏季は虫がみられる状態です。事務室などのごみ箱(館内には来館者向けのごみ箱はありません)を蓋つきにするなどは有効だと思いました。

●まずは、ごみ箱を蓋つきに変えるところから始めようと思います。アートソープを収蔵庫内で調湿し始めました。

●今回は、収蔵庫内の写真をもとに多くのご意見をいただいたので、それを参考に保存箱での保存・管理を行っていききたいと思います。

また、害虫の調査(トラップを置くなど)も改めてしたいと思いました。

●当館の事例を発表して、木川先生から直接ご助言をいただけたので、まずはそこから取り組みたいと思います。また、掃除や殺虫など、日常業務の合間にできることを、職員と手分けして行いながら、予算が必要なことや、大掛かりな作業について、上司との話し合いを進めていきたいと思っています。

質問3

今回の「資料保存」の研修を受けて、今後、自館で早速取り組みたいことは何ですか?

●エントランス付近の衛生面、照明の工夫、温湿度そして、展示説明パネル等の工夫(次世代へ継続可能な心に届く文言やデザインか)などに、資料と一緒に注目したいと思っています。

●それぞれの博物館が、自分の館の設備で工夫して行う資料保存のための取組みを見たいと思いました。資料・遺物の展示の仕方についてもどのような工夫があるのか見たいと思いました。

●館外とエントランス、展示室への動線で、外界からの侵入や、ごみ箱なども、今後は気になるポイントとなると思いました。

バックヤードを見る機会があれば、どのような保存・管理をしているのか見てみたい。また、展示ケース内についても、温湿度管理や害虫対策をどのようにしているのか注目したい。

●①データロガーをどこに、どのくらいの数設置しているのか ②昆虫トラップをどのポイントに設置しているのか ③飲食物や植物の持ち込み制限等を来館者へどのようにアナウンスしているのか ④利用者に対して、IPMの活動をどのように普及しているか。



博物館マネジメント人材育成研修事業
(ミュージアム/テクニカルコース)
【学芸員技術研修会】

⑤ 「梱包技術」

■ テーマ

「仏像の梱包はどこに注意すればいい?」「紐の結び方って何回やっても覚えられない」「掛軸を巻くと、いつもタケノコみたいになる」等々、作品の取り扱い方、梱包・開梱の仕方を実験的に学びます。

■ 講師

ヤマトグローバルロジスティクスジャパン(株)
九州美術品支店社員(美術品梱包輸送技能取得士)

■ 開催日時

2019年10月11日(金)10:00~17:00(9:30~受付開始)
佐賀県立博物館・美術館(佐賀県佐賀市城内1-25-23)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 研修開始(A班①「保護材の作り方・薄葉紙の特性と多彩な使い方を知る」、A班②「仏像作品の取り扱い方、梱包の仕方」B班①「掛軸の取り扱い方」、B班②「茶器の取り扱い方」「仕覆の紐掛け」
12:00 昼食 13:00 研修再開(A班、B班の実習内容を入れ替えて実施) 14:30 休憩 14:45 A班、B班実習「こんな作品の梱包の仕方は?箱づくりは?」(博物館側で予め準備し作品点について、講師が即座にどう梱包するかを見学) 16:15 グループワーク①「作品の取り扱いや梱包を通じた疑問をまとめ、質問してみよう」
16:45 グループワーク②「今日は意味のある時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

30名(佐賀13名、福岡11名、大分3名、熊本2名、鹿児島1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会から学んだことは何ですか?

(例、複数名で行う場合は「声がけをする」など)

● 梱包作業に入る前に、作品や資料をよく観察し、ダメージの状態、資料のうち分解が可能な箇所などを確認することが大切だと分かりました。実際にサプライズ梱包でも、特に古賀フミさん旧蔵の織機では、事前にどのように梱包するかという計画をスタッフさん同士で話し合っている時間が作業全体のスピード感に比べると長かったように感じました。手を動かす作業に入る以前に、作品や資料に関する情報をどれほど把握していて、それをチームで共有できるかが重要だと学びました。

● 資料に対する敬意、および所蔵者に対する敬意についてです。仏像などの宗教に関するものはもちろん、茶碗などの器物についても触ってはいけない箇所があるなど、考えさせられました。常に緊張感をもって、対象物・所蔵者に接する真摯な姿勢が、信頼を得ることにつながることを忘れずにいなければ、と思いました。

● 「梱包は、見た目も美しく」。いつもヤマトロジスティクスの方々の梱包は美しいと感じていたのが、資料を大切に梱包するということは、資料に直接触れる部分はもちろんのこと、外側まで隅々に気を遣うことなのだと痛感した。

質問2

実際の作業から、「梱包材」「仏像」「茶器」「掛軸」について、それぞれの取り扱いについて学んだことを書き出してください。

*「梱包材」

● 惜しいからといって、梱包材を使い回してはいけません。特に、作品と直接接する薄葉紙は、以前どのような資料を包んでいたか分からない。また、軸や器に付属する箱等々も重要な資料であるため、その取扱いにも気を配らなくてはならない。(例えば箱であれば、開けたあと、箱書きがある蓋表を、机と触れるように置いてはいけない、など)

● 薄葉紙の裏表を確認し、梱包する際の部位に合わせて大きさを調整する。

● 水族館では梱包材としてはエアークラップが主流なため、今回、薄葉紙を初めて扱い、名前も初めて聞きました。薄葉紙には目があり、使い方によっては簡単に裂けてしまうので、使う向きを考えておかないといけないことを学びました。

● エアークラップは必要な時以外は使う必要はない。薄葉紙と綿で布団を作る方法を初めて学んだ。館内では使いまわすこともあったが、本当は一度使ったら廃棄しなければならない(ですよね…)

*「仏像」

● 梱包した際の「美しさ」も梱包の重要な要素であり、丁寧な梱包とは大量の緩衝材を使用することではなく、むしろ必要最小限の量で美しく梱包することが肝要なのだとなりました。

● ①前からの見た目を美しくするために、薄葉紙の折り順に気を付け、紐は後ろで結ぶこと ②仏像は単なる美術品ではなく、利用者にとっては信仰の対象であるので、梱包前には、必ず一礼をすること。

● 二人一組で作業を行う。仏像の手や顔など凹凸のある部位は、それにあわせて梱包材を作成し、凹凸をできるかぎりなくす。首や顎など仏像の丈夫な部位を確認し、紐をかけ梱包材を資料に固定する。

● 弱い部分を保護するというより、凹凸をなくすという意識で梱包する。劣化している部分、繊細な部分は無理に梱包しない。

● 破損箇所は極力梱包しない。凹凸をなくしていくような梱包をする。民俗資料等にも応用可能な基本的動作を学んだ。

*「茶器」

● 器を持つ時には肘を床や机につき、必要以上に高く持ち上げないようにする。

● 茶碗には「顔=正面」があるので、必ず借用時にその面を確認しておく。茶碗の「顔」と外箱の紐の結び方(方角)は対応している。誰が開けても展示のときに正面が

分かるよう、必ず確認・対応させて収納をする。

● 茶器は外からの衝撃で割れてしまうことが考えられるため、空間に『あんこ』を詰めるが、詰めすぎると内圧が掛かりすぎ割れる可能性があるため、8割程度に『あんこ』を詰め梱包することを学んだ。

● 仕覆の扱いは、大学の学芸員実習時に習った正式なやり方ではなく、より簡単な方法を教えていただき、これならば早く覚えていられそうだと思います。まさに現場の知恵だと感じました。

*「掛軸」

● これも、茶器同様、大学の学芸員実習以来でしたが、学び直しができてよかったです。桐箱の開け方(片端から斜めに開ける)は、気を付けたいと思います。

● タケノコになるのは固く巻きすぎだと分かり、今後気を付けられそうです。

● 掛軸の展示する時は左手で持ちながら左の脇に挟み込むようにすることで、落下をさせないように意識する事を学んだ。片付ける時は掛軸の半分くらいを巻き上げ、矢筈を使い掛軸上端を下向きにしながら風袋を収納することを学んだ。

● 本体をなるべく傷めないようにするために、しまう際には軸を持ち、紐を巻き付ける際には手を添えるだけの力加減にすること。この時、縦方向に持つとやりやすい。

質問3

今後の梱包作業、取り扱い方で活かしてみたいこと、気をつけたいことは何ですか?

● 自分がこれから梱包、輸送しようとしている作品がどのようなものなのか、大きさ、重量、素材、状態などを十分に把握し、それを運送業者の皆さんや学芸員で共有して作業に挑むように心掛けたいと思います。

● 水族館では仏具などの資料を取り扱うことはないが、剥製を扱う事が稀にあるため梱包技術は応用できると感じた。また剥製なども希少なものもあり、かなり古いこともあるので仏像の梱包作業のように、破損しそうな場所があるのかなど1人ではなく2人1組で行うように気を付けて臨みたいと思う。

● これまで、借用は苦手意識から先輩や業者に頼りきりのことが多かったですが、これからは資料の状態を自分で観察して、アイデアを出し、チームを引っ張っていけるように徐々に慣れていければいいなと思いました。



⑥ 「博物館教育」

■ テーマ

「美術とは『ビックリ』することである」、そして「博物館教育とは自立した個人を育成するものである」と話す齋正弘さん。米国留学をもとに、帰国後の宮城県美術館における長年の実践事例や福岡市美術館の探検を通じて博物館教育の意味を考えます。

■ 講師

齋 正弘 (美術家、元宮城県美術館教育普及部長)

■ 開催日時

2019年11月18日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

福岡市美術館(福岡県福岡市中央区大濠公園1-6)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:20 講義①「学校教育と博物館教育の違いを考える」 11:45 昼食 13:00 ワークショップ①「うまい絵の描き方-見えるものを見るままに写す」 13:30 ワークショップ②「福岡市美術館探検をしてみよう」 14:40 休憩 14:50 講義②「ワークショップとは？」 15:10 ワークショップ③「新聞紙を天井まで届かせてください」 15:45 ワークショップ④「ハムスターになる練習」 16:20 グループワーク⑤「講義・演習を通じた疑問をまとめ、質問してみよう」 17:00 終了

■ 受講者数

23名(福岡15名、佐賀3名、長崎2名、熊本1名、鹿児島1名、山口1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で齋先生の講義・演習・ワークショップで学んだこと、びっくりしたことは何ですか？

●「教育普及」担当者の心構えや身振り・手振り、子どもの年齢に応じた世界観のような「相手を知る」ことの基礎から話が始まったことに驚きました。そうか、ここから始めないといけないほど、日本の美術館での教育普及って立ち遅れているんだな...と感じました。ただ実際そういった内容を「習う」機会はほとんどないですし、担当者の資質、みたいなことで片付けられてきた部分なのかもしれないとも思いました。研修として人から教えられることで、改めていろいろ振り返る機会にもなりました。他には、参加者の集中力をキープしたり、ギャラリーまでの導入につながる「ネタ」的なものをたくさんいただいたな、と思います。具体的に使える情報/内容が多く、自分なりにカスタマイズしながら今回の学びを生かしたいです。

●今回は、写真を描き写す作業による「見る」の確認や、新聞を天井に届かせるワークショップが新鮮でした。自分で実際に体験してこそ、説得力を持って教育普及に役立てることができると実感しました。新聞を使ったWSでは、没頭する(理性を取り払う)ことの楽しさと同時に難しさも感じ、だからこそ、もしかしたら現代の大人にこそ必要なWSかも知れないと思いました。

●子どもには知っている言葉しか伝わらない。美術館・博物館は知識を増やすところではない。学校の先生が評価しづらいもの、やってないことをするところ。ワークショップは目指すものは一つではない。子どもたちそれぞれの答えが違い、ゴールが違うものだ。美術館探検は、単なる施設の説明ではない(どうして触っていけないのか、走っていけないのかの理由を感じてもらうため)

●鑑賞者が知っていることしか鑑賞には使えない、鑑賞者が体験したこと、知っていることに作品の情報を引き寄せて、鑑賞を促すことで作品と向き合う大切さを伝えられるということを学びました。自分のギャラリートークに

も取り入れられるよう努力していきたいと考えています。

●特に驚いたことは、「見えるようにかいて」という言葉です。その前の活動、黒く塗りつぶす行為から、黒いものだと先入観があり、その先入観で私自身物事を考えていたことです。それに気づいた時私は、物事に柔軟なつもりであったけど、先入観で、頭で考えている自分に気がつきました。芸術を扱う仕事であるのに、五感を働かせていなかった自分を見直すことができたし、今後の「ものを見る視点」が変わってくると思います。

質問2

展示室での鑑賞から、どんな気づきがありましたか？

●「嫌いなものを探す」という指向が、意外にも好きなものや気になるものを探すよりも探しやすいことに驚きました。そしてなぜ気に入らないのだろう?と考えたとき、そこに自分の経験や人生が密接にかかわっていることに気づき、鑑賞によってもたらされる気づきや感情の個々の広がりや人の数だけあるのだなと改めて実感しました。

●最近、一般の人向けに対話型鑑賞のセミナーやワークショップを開催する際に、題材の選び方として、近現代の作品をどう選ぶかが毎回悩むところでした。今回、あらためて齋先生の方法を観察して、大切なのは「鑑賞者が知っていることから、いかに広げることができるか」であり、作品云々よりも「どう質問を投げかけるか」が肝であると再確認することができました。

●初歩的なことだが、持っている知識でしか作品をみるできないということ。だからその知識を刺激して作品をみていくことが大切だと改めて思った。作品を制作したときの年齢をわりだして、お父さんやお母さんなどその年齢に近い人物を想像させる。

●作品についての解説ではなく、作品をどのようにして身近なものへと近づけるのが大切だと感じました。そのことで、作品と自分が繋がり、深まりを感じることができるし、次作品に出会ったときに作品との距離が縮まるのだと思いました。

●まずは参加者に「聞いてみたい」と思わせるための導入部分の工夫が大切だと感じました。漠然と作品全体を鑑賞してもらうのではなく、着目する場所を観察して見るように促していくと、「美術館に来たが、作品をどのように見れば良いかわからないので、戸惑ってしまう。」という来館の方も参加しやすいギャラリートークにすることが出来ると、気づきました。

●いろんなものが展示されている美術館という存在が

当たり前過ぎて、逆に見落としていたと気づきました。好みのものに立ち止まり、見入っているだけの鑑賞をしていたと思い、そちらからの鑑賞でしかしていなく、先生の嫌いな作品を探してくださいという言葉に、ドキっとした自分がいました。何故この作品が嫌いなのか、それを感じ考えるのも鑑賞だと気づきました。

質問3

グループワークの意見交換から、どんな気づきがありましたか？

●当館は歴史系の博物館で、ワークショップでも正解を導き出すようなクイズ(それこそ学校で学べること、学習の反復が中心)などを取り入れることが多いのですが、違う学びの形があってもよいのだと考えさせられました。例えば、お話しにあった「漢字」を象形文字として鑑賞するというヒントをもとに、歴史系の資料も美術作品として違った目線で見ると面白いのでは、と趣向の異なるアイデアのヒントになりそうです。

●特に歴史資料において「鑑賞者に聞く耳を持ってもらう」ためにどうしたらよいか、学校から来た子どもたちを対象としたときに悩んでおられる館が多いことを感じました。意見交換をしながら、「自分たちが教えたいこと(知識)よりも、その場で彼らが感じたこと」を尊重することこそ、学校教育ではないからできることだという気づきが出てきたのが嬉しかったです。

●言葉の大切さについて話し合いました。子どもに対する言葉のかけかた。距離を縮めるための、最初のスキンシップ。無計画のようで、齋先生は事前に準備し、自然に行っていること。とても勉強になりました。また、緒方先生がペンを集めた際、「あれ、茶色のペンが遊びに行ってるな...。」と、つぶやかれたこと。子どもに「ペンがないから、見つけなさい。」と言うより「茶色のペンが遊びに行ってるから、つかまえて〜。」と言うと、きっと喜んで見つけてくれるだろうなと思いました。同じ行動でも、言葉一つで楽しい行動になるのか、ただの作業になるのか変わってくるなど、考えることができました。

●先生との展示室での鑑賞について振り返ったときに、学芸員の役割は翻訳者として言葉がけをすることだという意見があり、とても納得しました。多様な側面をもつ作品のどの部分を切り取り、鑑賞者が知っている知識のなかから伝わりやすい内容と言葉で話すのかということを常に念頭に置きたいと思いました。



①「照明技術」

■ テーマ

テーマ:「毎回、展示照明は悩むよなあ」「どんなLEDを選んだらいいの?」という皆さん。今回は照明の基本知識を学んだ後、ハロゲン電球、LED等を用いた作品を魅せるための展示空間づくりについて、大分県立埋蔵文化財センターの展覧会を事例にグループワークを通じて学びます。

■ 講師

藤原 工 (株式会社灯工舎代表取締役)

■ 開催日時

2019年11月25日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)、
26日(火)10:00~17:00

■ 開催場所

大分県立埋蔵文化財センター(大分県大分市牧緑町1-61)

■ 内容

【1日目】10:00 自己紹介、「展示照明」の悩みを共有する
10:30 講義①「照明の基礎を知る」 12:00 昼食
13:00 講義②「展覧会の展示照明計画の作り方」
13:20 グループワーク①「ハロゲン電球、LEDを使って展示空間を作る」 14:30 グループ発表①「工夫した照明演出について説明する」演習①「藤原先生がグループの展示空間を評価・解説する」 16:00 休憩 16:15 講義③「ここは押さえておきたい『照明技術のポイント』」 17:00 終了
【2日目】10:00 演習②「昨日のふりかえり、今日の照明作業の目標設定」 10:30 グループワーク②「他のグ

ループの展示空間を意識しながら、空間全体の照明をまとめる」 12:00 昼食 12:50 グループ発表②「工夫した照明演出について説明する」 13:30 演習③「藤原先生がグループの展示空間を評価・解説する」 14:10 グループワーク③「評価・解説を踏まえて展示空間を再構築」 15:10 休憩 15:25 講義④「展示用LED照明と導入のポイント」 16:10 グループワーク④「講義・演習・グループワークを通じた疑問をまとめ、質問してみよう」 16:40 グループワーク⑤「今日は意味のある時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

22名(大分9名、福岡5名、佐賀2名、山口1名、大阪2名、東京3名)

■ 事後アンケート

質問1

2日間の実習で学んだ照明技術(基本的な知識、ちょっとした工夫、テクニック)は何ですか?

●LEDの特性や光源の仕組みなど、照明器具の基本的な知識を得ることができました。あわせて、LED照明を探す際に、どの数値に注意すればよいのか学ぶこともできました。展示照明の実習では、鑑賞の際にノイズとならないような照明の配置や光源の加工方法など、これまで知らなかった情報が盛りだくさんで、大変勉強させていただきました。

●今までは演色性が高いものであれば、より自然に近い色が出せると思っていたが、演色性の中でもR9(赤色)、R12(青色)についても気にすることで、さらに効果のある照明演出が出来ると言う事を初めて知った。

●昨年実施の「照明リニューアル」の講義の中で、理解

不十分だった演色性についてよく理解できた。「光を整える」ということの大切さが分かった。また、色温度や光量を変えるフィルターがあること、ライティングレールを仮設して適切な位置からスポットを当てる方法、ブラックラップでバンドアを作り、ノイズになる光を遮断する方法など、これまで妥協していたことを解決する術があることが分かった。機材や展示室の設備のせいにしてきたが、工夫次第でできることはあることがわかった。

●まず、照明を考える上で注意すべきポイント(不適切な影・光・反射がノイズになること、光の色温度・光量・配置を整理すること、照明の位置取りに注意すること等)を意識化できたことによって、展示室の照明を見るときに今まで見過ごしていた点が目に見えるようになったと感じました。また、照明において光そのものだけでなく、より光を効果的に用いるための小道具(資料の背景に用いる壁紙、光を遮ったり反射を抑えたりするシート、照明器具にかけるカバー等)も重要で、それらは高価な機材を買わずとも工夫の余地があると学びました。

質問2

今後、自分たちの館で試してみたい、気をつけたい照明技術は何ですか?

●一般的なメーカーの売り込み文句に相反して、LED器具は扱いづらいというのが当館設備担当者間での共通意見でした。しかし、LED器具についてのさらなる理解や展示用照明でも様々なアタッチメント等を利用することで、一貫性のある照明空間を構築可能であることなど、知識や経験の共有を行い、可能な限り積極的なLED器具の利用(応用)を進めていきたいと思えます。また、器具ごとの演色性やロットによる色温度の違いなど十分留意しながら、それらの作業に当たりたいと思えます。

●自分たちの館は照明が固定されており、照明の移動や明暗の調節が困難であり、とても明るい展示室となっている。そのため、ブラックラップや外付けのLEDライトの使用などを検討し、雰囲気のある空間作りを演出していきたい。また、展示における演色性と色温度の重要性を体感したので、今後はそうした点も考慮しながら、照明を取り入れていきたい。

●当館は照明の環境があまりよくなく(館の設計上)、なかば諦めていたのですが、専用の延長コードと結束バンドでライトを増設できる可能性を知る事ができたので、少しずつ改善していきたい。また、遮光紙やテープを使った工夫でもできることがあるので、やって見たい。今後、大体的に改修や建替えがあり、自分が立ち合う機

会があれば、今回学んだ事を照明の設計に生かしたい。

●作品の照明だけでなく、鑑賞者を入口から展示室へとストレスを感じさせることなく誘導し、展示に集中させるためにも照明が大きな効果を発揮することを学びました。当館には、入口の回廊は明るいけれども、室内は暗色の壁面で暗い展示室があります。また、その展示室は比較的展示替えをしているにもかかわらず、なぜか観覧者数が少ない部屋もあります。今回の研修によって、光による自然な誘導ができていないのではないかと、この可能性にも思い至ったので、作品だけではなく、特に入り口の照明を考慮した、全体の照明計画を考える必要があると思えました。

質問3

今後、他館の照明を見る時に、どんな点を気にかけて見ますか?

●水族館の生物展示では、他の博物館とは違う形で照度などを気にする必要がありますが、近年は生物よりも変わった形の水槽に着目させるような奇抜な照明空間を作っている施設が増えております。私としては、「生物そのものの色をいかに美しく際立たせるか」が本来の水族館照明であると考えておりますので、各館の展示照明が何をみせるために設計・構築されているのかについては注目・推察しながら観覧していきたいと思えます。

●これまでも気になった照明の当て方の場合には、天井など光源を探していましたが、影の落ち方や展示品だけでない全体の雰囲気など、目を凝らして照明の仕方について気にかけていこうと思えます。

●明る過ぎて、展示物の存在を邪魔していないかや、展示物そのものの色や雰囲気を照明により演出出来ているか、ガラスケースに映り込んでいないかに気を付けて見たいです。

●どこにどのような光を当てているかという点に着目し、作品の演出の仕方と作品への解釈を照らしあわせて見てみたい。ライティングレールの位置や基本照明とスポットのバランスなどにも気をつけ、今後の参考にしていきたい。

●一灯一灯の照明を見るというよりも、全体を通して展示のどの部分が強調されて空間が作られているのか、つまり、どのようなメッセージを主催者が発しているのかを見ようと思っています。



⑧ 「ユニバーサル・ミュージアム」

■ テーマ

「無視覚流鑑賞法とは?」「見常者と触常者とは?」「ハンズオン展示の意味は?」「なぜさわることが必要なのか?」など、ユニバーサル・ミュージアムの疑問を広瀬先生の講義とさわる体験を通じて学びます。

■ 講師

広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館 准教授)

■ 開催日時

2020年1月27日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

沖縄市立郷土博物館(沖縄県沖縄市上地2-19-6)

■ 内容

10:00 自己紹介 10:30 講義「未開の知に触れる-ユニバーサル・ミュージアムとは何か-」 12:10 昼食
13:00 グループワーク①「A班:無視覚流鑑賞法の体験」グループワーク②「A班:無視覚流鑑賞法の記録記入・共有」/B班:展示室見学」 14:00 グループワーク③「B班:無視覚流鑑賞法の体験」グループワーク④「無視覚流鑑賞法の記録記入・共有」/A班:展示室見学」 14:35 休憩 14:50 グループワーク⑤「グループ毎に無視覚流鑑賞法で気づいたことを話し合おう」 15:20 グループワーク⑥「見ながらさわろう」 16:00 「広瀬先生への質問を考える」 16:20 演習「広瀬先生が質問に答える」 17:00 終了

■ 受講者数

35名(沖縄30名、福岡4名、佐賀1名)

■ 事後アンケート

質問1

午前・午後の広瀬浩二郎先生の講義・コメントから学んだことは何ですか?

●当日はアイマスクをして活動することが怖くて、本当にドキドキしていました。もし、自分がある日、視覚障がい者になったらどう感じるのかというのを想像すると、不安にもなりました。自分自身がユニバーサル・ミュージアムを必要とする人々に寄り添えるのかという不安がありました。しかしそれと同時に、この研修会が終わったときに、自分は今日の体験をどう感じるのだろうかというワクワクもありました。そういった事前感じていた不安要素は、ご自身が視覚障がい者である広瀬先生から視覚障がい者が日常的に世界をどのように感じ、生活されているのかという体験を交えたお話を聞く中で、かなり解消されました。特に講義の中で紹介していただいた「発建」という概念は、新鮮なものだと感じるとともに、自分自身が普段は視覚にかなり頼っていることを改めて認識しました。また、障がい者だけではなく、健常者にとっても「じっくり」触るという体験はそれだけ資料と向き合うことであり、言葉での観賞だけではなく「触る鑑賞」がとても有効だということも学ぶことが出来て良かったです。

●私が特に印象的に感じたことは、『「マイノリティのため」では広がらない。続けていくためにはマジョリティに受け入れられるものである必要がある。』という言葉です。唯々、マイノリティのためとしてその場しのぎ的に行うのではなく、館として継続していけるような取り組みを考えていかなければならないと強く感じました。

質問2

午後の「見ないでさわる」そして「その体験を書き出し交換する」、その後「見ながらさわり、意見交換する」という「確認、そして探索」という流れから学んだことは何ですか?

●最初にアイマスクをして触ったときに、自分が知っている資料は、触った瞬間にどんなものかイメージが湧きすぐに分かりました。逆に触った感触からは分からない資料は全体を把握しようと丁寧に触りましたが、イメージを膨らませるというのはかなり難しかったです。意見交換の際にも各々が知っている資料は、具体的なイメージの共有ができましたが、イメージした色などの細部に違いがあったのは興味深いものでした。

●見ながら触ったときは、見ないで触ったときのイメージと形や表面の質感がかなり違うと感じました。特に岩石のデコボコやゴツゴツしている、スペース、ツルツルしているというのも普段はかなり視覚に頼った感覚だったということに気づきました。健常者がこのような体験をする場合、個人によってかなり印象が違ってくるとこの感じました。

●初めて体験する、「全く見えない状態での探索」は、未知であることから不安が大きく、最初は「触る」ことのみ意識がなくなってしまっていました。周囲の事務局の方に「匂いは?」などの声かけをしていただいて、初めて他の感覚に気づき、とても驚きました。また、見えない状態で触ると、そこから得た情報を身近な既知のものに当てはめて考えてしまうことから、実際の色とは全く違うものを想像してしまいました。このような経験から、触らないと分からないこと、触るだけでも気づけること、他の感覚を用いて分かること等、多種多様な鑑賞方法があることを実感することができました。

●私は先に資料に触れる体験をしたのち、展示室へ向かいましたが、展示室へ入った瞬間から、触れたものと同じ形の資料をさがすモードに入っていました。事前に見ないで触ることで、資料についてもっと知りたいという心理が働くことを実感できました。

●当館は10年ほど前から触察プログラムを実施していますが、あらためて自分が触察を体験してみて「発見したことを自分の言葉で表現し、周りの人と驚きや感動、疑問点を共有する」ことの楽しさ、大切さを再認識できました。今後の対応では今まで以上に対話の時間に重点を置きたいと思います。

●触察で確認したことと、チームメンバーと意見交換、そして最後に目で確認するという過程は、学習していく過程として重要であるだろうと感じました。普段博物館

など教育施設で実施する時には、視覚がメインの学習方法ですが、可能であれば、グループの意見交流と五感で活用できる教育プログラムがあれば、学ぶ過程は更に楽しくなると考えています。

●私のグループは、先にアイマスクした状態で手と体を使って「形・重さ・材質・臭い」の情報を少しずつ把握し、その後、意見交換と展示室見学をして、実際に目で見て、触った情報と照らし合わせました。見ると触るでは一つの資料に対しての時間のかけ方が全然違って、長く向き合い視覚情報を頼らない分、興味関心が深くなり、記憶に残るということをもっと学びました。

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうだなと思う点があればお書きください。

●参加者からの意見でもありましたが、展示室の入口前などで、展示室にあるものと同じものをブラインドタッチしてから入室し、自分が触ったものを探してもらうなどすると観覧者にも違った体験をしてもらえるのではないかと思います。答えを見せずにモヤモヤしたまま帰ってもらうということもしてみたいと思いました。また、ハンズオンなどを通して、何を伝えたいかというのを意識することの大切さを改めて感じました。

●これまで当館では、触って鑑賞するという取り組み自体を行ったことがありませんでしたが、この度の研修で学んだことを踏まえ、先日はじめて小中学生向けに、資料に触る授業を行いました。経験が不足しているため、まずはということで目で見ての体験授業としましたが、研修であったようにノーヒントで、体感して考えるということをした結果、普段はおそらく情報を得るだけの受動的鑑賞を、考えながら学ぶ鑑賞にすることができたようです。今後、定期的、恒常的にこのような体験ができるようにし、また、無視覚流鑑賞についても、環境を整え実行できるように取り組んでいきたいと考えています。

●健常者への資料の見せ方の一つとして、展示室に入る前に、目隠しをして資料をさわってもらい、同じものを展示室で探してもらうという方法を試してみたいとなりました。

●動物園なので、まずは見ないで動物の骨を触ってみて、その後に園内に「どんな動物の骨だろう?」みたいな教育プログラムができればいいと思っています。手で動物の骨の形を感じて、動物の食性や筋肉の形を想像して、そして実際に動物を当ててみたら、子ども達にも動物の解剖学的学習ができると思います。



「2025年問題に向けた高齢者の健康と博物館の役割」

① 「動物園 de アニマル・セラピー」

■ 講師

山本 真理子 (帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科講師)

専門分野: 介在動物学

■ 講師から一言

動物は医療、福祉、教育など様々な場面で人々の生活を豊かにしてくれています。一般にアニマル・セラピーとよばれており、今なお発展し続けている分野です。アニマル・セラピーとは何か、動物からもたらされる効果のメカニズムに触れながら、動物園での応用について共に考えていきたいと思います。

■ 開催日時

2019年9月23日(月・祝)10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

大牟田市動物園 (福岡県大牟田市昭和町163)

■ 内容

山本先生の講義は、「アニマル・セラピーとは?」「動物がもたらす効果」「動物の何が良いのか?」「動物をどう活用するのか?」「動物園と人の健康」というテーマで進んだ。午後からは、参加者は会場となった大牟田市動物園の椎原園長の案内で「ふれあい動物体験」「動物園内探検」を行なった。最後は「あなたのためにプログラムを作ります」というワークショップから、日ごろ動物園と係わりが少ない住民向けのプログラムづくりを行なった。

■ 受講者数

18名 (福岡16名、宮崎1名、山口1名)

■ 事後アンケート

質問1

山本先生の講義、また質疑応答を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

● 高齢者への動物を介在介入した活動は治療として用いるだけでなく、生活の質の向上、健康であり続けるために必要であると感じました。

● 動物を介在させることでQOL、介助者のストレス軽減、会話の促進など良い効果がたくさんあることが分かりました。多様な場面での動物の活動が考えられることから、社会教育の視点から従来の室内での講義形式から、アニマル・セラピーの活用方法を組み立てる時代に変化しており、これからの生涯学習に反映できたら面白いと思いました。

質問2

椎原園長のお話、モルモットのふれあい体験、そして大牟

田市動物園の探検を通して、気づいた事をお書きください。

● 動物に対して福祉に配慮した動物園の取り組みを伺って、動物が安心して過ごしている姿を見ている私たちに癒しをもたらしていることに気がきました。

● 動物本位の考え方は、人も動物も幸せにする。それを高齢化率が高い大牟田で実践していることにも意味があり、人と動物の幸せを考えるきっかけにもなる。

質問3

アニマルセラピーの考え方を活用した博物館教育活動のアイデアをお書きください。

● 北九州市立美術館には近隣に到津の森動物園があり、個人的に前々から何か連携した活動はできないかと思っていました。動物園で動物と触れあい、リラックスした状態で美術館の作品を鑑賞すると感性が広がるのではと考えました。また、当館にも動物をモチーフにした絵画作品や彫刻作品があります。動物園で実際の動物を観察して、美術館で動物の作品を鑑賞して、動物の絵画や立体を創作するツアーができればと思います。

● 動物がいることで場が和み、共通の話題ができ会話も弾むことが分かりました。社会教育の場では最初は緊張します。席に座っても見ず知らずの人になかなか話しかけづらいものですが、会場に動物(室内ならハムスター等)がいると、ファシリテーターの進行を待つことなく、自然と会話ができ仲良くなれると考えています。

通常のアイスブレイクには、ファシリテーター、コーディネーターの役割が重要ですが、何分人手不足が否めません。参加者にファシリテーション能力がある人がいれば、うまく回りますがいつもそうとは限りません。そういった意味でも人をつなぎたい時は、アニマル・セラピーを活用すべきだと思います。まずは社会教育の会場として、社会教育関係者に利用を提案しても面白いと思います。



② 「美術館 de 音楽療法」

■ 講師

井上 幸一 (福岡女子短期大学音楽科准教授)

専門分野: 音楽学/音楽療法

■ 講師から一言

音楽療法は、介護予防や健康増進を含む心身機能の維持・改善、行動の変容などを目的として、高齢者をはじめ幅広い対象に実践されています。美術作品によるイメージを基に、楽器を用いて「音・音楽に包まれる空間」を作り、その響きを共有するミュージック・アクティビティの体験を行いたいと考えています。

■ 開催日時

2019年10月6日(日)10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

須恵町立美術センター久我記念館 (福岡県糟屋郡須恵町大字須恵77-1)

■ 内容

井上先生の講義は、「社会における音楽とその役割」「音楽による生理的・心理的作用とエビデンス」「音楽行動としての楽器の活用」というテーマで進んだ。午後からは、展示室のグループで作品鑑賞から受けたイメージを即興演奏にするワークショップを行なった。その後、作品の制作者のギャラリートークを聞いてから、即興演奏と比較しながら、参加者自身への心理的な作用と効果(例えば、コルチゾールによるストレスチェック法など)についての意見交換を行った。

■ 受講者数

20名 (福岡18名、山口1名、東京1名)

■ 事後アンケート

質問1

井上先生の講義、また質疑応答を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

● 芸術作品を通じて現実社会の普遍的理解に進むソーシャルアートという概念は、あいちトリエンナーレ騒動などで芸術の価値を考えさせられていた時でもあり、興味深かったです。

質問2

美術館での「鑑賞とセッション」について、あなたの中で起こった変化(解説有無の鑑賞方法での気づきなど)、仲間とともに過ごした時間(音を探る意見交換や即興演奏、言語的・日言語的コミュニケーションなど)について、感想をお書きください。

● 受動的に眺めるだけでなく、瞬間を切り取った絵画を

音楽という物語に変換していく能動的な体験をすることで、より深く絵の世界を感じる事ができました。自分の主観、自分がどう感じたかを他人に上手く伝えようとする作業によって、主観的経験に普遍的な客観性が加わっていく過程を経験できて良かったと思います。

● 作者解説で作成意図を知ることで、また違った視点から絵を解釈する事ができました。

最初に作成意図を示されていたら、解釈や音作りのイメージが受動的な狭いものになるので、まず鑑賞者のみで作ったイメージを共有し、それから作者の意図を知り、再考するという段取りは良かったと思います。

質問3

音楽療法を学んだことで、日常生活での「あなたと音の関わり」の変化をお書きください。

● これまでは音楽から場面をイメージする事はありましたが、絵画から音楽をイメージすることはほとんどありませんでした。簡単な楽器を手元に置いてみたくなりました。

質問4

音楽療法、または音を介在させた博物館教育活動のアイデアをお書きください。

● 今回の講座で経験した、絵画を誰でも音が出せる簡単な楽器を使った合奏で表現する作業は、協力的なチームワークの在り方を体験できる良いものだと思います。課題に対しての、それぞれの個人の感じ方の違いと共通点を探りながらの共同作業を、気分的に構えずに行える点が優れている。子供から大人まで取り組める社会的教育価値が高いものだと思います。そこまで能動的な活動では無いですが、講義で例示されていた相互に着想を得ている絵画(あるいは彫刻や建造物、文学、歴史)と音楽を同時に鑑賞する経験は、より深い芸術作品の理解、人の理解に繋がると思います。比較的高い心身機能を保っている高齢者の介護予防事業に組み入れていくことが出来れば面白いと思います。



「2025年問題に向けた高齢者の健康と博物館の役割」

③ 「庭園・美術館 de 園芸療法」

■ 講師

岩崎 寛 (千葉大学大学院園芸学研究科准教授)
専門分野: 環境健康学

■ 講師から一言

園芸療法とは、植物の栽培といった一般的な園芸活動だけでなく、植物を用いたクラフトや庭園の散歩など、身近な植物を五感で感じることで、ストレス緩和や、落ち込み・不安などの感情を改善するものです。本講座では、園芸療法の事例を紹介しながら、その効果や身近な実践方法についてお話しします。

■ 開催日時

2019年10月27日(日)10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

福岡市美術館 (福岡県福岡市中央区大濠公園1-6)

■ 内容

岩崎先生は、「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」というテーマで、園芸療法の基礎知識の紹介と、それを活かした地域ケアについて、千葉県における健康屋台や出前園芸といった実践例を上げて説明した。午後からは、美術館に隣接する大濠公園を散策しながら、緑資源の活用方法を参加者に解説した。最後はワークショップ「いろいろな豆を使ったタオルハンガーづくり」を楽しみ、植物を使ったプログラム企画立案のアイデアをグループで共有した。

■ 受講者数

19名(福岡15名、佐賀1名、鹿児島1名、広島1名、大阪1名)

■ 事後アンケート

質問1

岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

●生命のある緑を感じることで、人の能力が高まったり、自律神経系の調整効果、中立的な状態に近づける効果があるという研究結果が興味深かったです。

質問2

ワークショップ「豆ハンガーづくり」を通して、気づいた事をお書きください。

●作る前はどうすればきれいに作れるのか、配色などを考えて難しそうだなと思ったのですが、やってみると夢中になり楽しめました。透明なチューブに様々な色や形の豆を入れていくと個性が出てくる過程が面白かったです。

質問3

岩崎先生と一緒に公園散策した時に、先生のお話から気づ

いたこと、今までと違った散策体験などをお書きください。

●今まで疑問にも思わなかった大濠公園の常緑樹は、公園に植える木としては比較的珍しい樹であることが意外でした。下枝刈りを入れて、見通しを維持していくことで、快適で安心感のある公園内の林が出来ることを知りました。公園の花などの植物に触れたり、においをかいだりして、楽しむことを長くしていなかったことに気がきました。

質問4

園芸療法を学んだことで、日常生活で起こっている変化をお書きください。

●土や緑に触れる時間を増やしたいと思った。自分で緑の医学的効果がどの程度あるのか検証できる方法がないか考えています。講義で述べられていた自律神経系の評価に心電図を用いたものは、心拍変動率解析だと思のですが、今は携帯できるサイズの測定機も出てきているのでそれが使えないかと思っています。ただ、岩崎先生が繰り返し難しいと言われていた実験の対照群設定が難しい。まずは自分の変化を追って、緑の多く触れた日とそうでない日に差があるのか確かめています。

質問5

園芸療法の考え方を活用した博物館教育活動のアイデアをお書きください。

●動かない植物ゆえに観察者の方が動いて見るという関係性は絵画や彫刻と共通するものだと思う。植物が人に与える効果と同様に、各々の芸術作品が客観的に人に与える効果(自律神経系、ストレス耐性など)を検証することが出来れば、見ているだけで血圧が下がる絵画特集とか、置くだけで仕事の効率が上がる絵画特集とかの企画も出来そう。緑の中で食事をするとおいしい料理とそうでないものがあるように、絵画や彫刻も置く環境によって美しさが変わってくるかもしれない。



8-3

④ 「博物館 de 回想法」

■ 講師

市橋 芳則 (北名古屋市歴史民俗資料館長)
専門分野: 博物館学

■ 講師から一言

回想法は、地域に暮らす高齢者を元気にしていくプロジェクトとして活用されています。博物館と高齢者ケア・認知症予防・健康推進などを推進する福祉関係の部局とが連携を図った「思い出ふれあい(回想法)事業」を2002年から実践しています。私たちは、これを「博福連携」と名付け、活動の軸の一つとしています。

■ 開催日時

2020年1月17日(金)10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

大牟田市立三池カルタ・歴史資料館 (福岡県大牟田市宝坂町2-2-3)

■ 内容

市橋先生の講義は、「地域回想法と博物館」「北名古屋市歴史民俗資料館の取組み」「生涯学習と回想法」というテーマで進んだ。中でも博物館の地域回想法事業と福祉行政が連携する「博福連携」による取組みは、高齢者ケアを考える意味で興味深かった。午後からは、参加者が展示室内をグループ毎に散策し、気になった作品について、それぞれの思い出を回想する時間を作った。最後は「モノを介在させた語り合いの効果」についてグループ毎に話し合い、それぞれから発表し、情報共有をする時間とした。

■ 受講者数

21名(福岡19名、長崎1名、山口1名)

■ 事後アンケート

質問1

市橋先生の講義、また質疑応答を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

●認知症の改善効果も印象深かったのですが、地域回想法を通じ、地域住民のコミュニティが高齢者を中心に強化されていく様子が非常に印象的でした。地域回想法は、地域住民がお互いを理解するための共通基盤を作る手法としては非常に優れていると思いました。

●博物館という場所は昔の資料を扱うというイメージが強いですが、その資料の時代を生きた人々にとってはその人の"キオクの展示"となる。という言葉が印象に残っています。懐かしさを共有し、共感する事で親密度

も増すと思いますし、新たな人間関係も構築され、高齢者の居場所になっていると思いました。

質問2

大牟田市三池カルタ・歴史資料館の班ごとの展示室探検をもとに、お互いの回想を語り合う、他者の回想を聞く中で、作品鑑賞で新たな気づきをお書きください。

●人それぞれの捉え方の違いが面白く、自分とは違う他者が居るありがたさを感じました。知らないことを知ること、相手が知らないことを自分が知っていたら教えてあげることが楽しいことでした。

●モノに付随した自分自身の体験を話し始めると、私が想像していた以上に皆さんいろんなお話をされていました。ある人がある作品を鑑賞し回想を始めると、その作品が他者にとっての回想を引き出す直接の媒体でなくとも、話の中で共感できる話題ができ、別の人への回想へ繋がっていく場面がありました。

質問3

資料=モノを介在させた回想法から、皆さんの現場(博物館活動、医療福祉の現場など)でどのように活用できそうですか。あなたのアイデアをお書きください。

●芸術を通して参加者の共通理解を深める芸術療法と同じく、回想法もお互いに良く見知った日常にある共通のモノから出てくる記憶を共有することで、相手をより深く知るきっかけになると思いました。従事者や利用者の相互理解を深めるチーム作りに生かせそうです。

質問4

各班の語り合い(世代間の交流)を通じて、何か気づいた、嬉しかったことなどがあればお書きください。

●年上の世代、年下の世代と語り合うと、徐々に生活が変わっていく暮らしを実感し、その中で自分の世代の位置が分かり面白かった。自分の世代(50歳前後)までの子供時代は男女で遊びもかなり違っていた。良くも悪くも男らしく、女らしくに価値観を置いて育てられた世代だったことを実感しました。



8-4

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める 米国・英国博物館との交流事業

■ 米国調査の日程

2019年10月16日(水) ニューヨーク

1. メトロポリタン美術館クロイスターズ

(インタビュー/マリー・クラボット氏)

フランスから移築された修道院で構成された建物で、中世ヨーロッパの美術品が展示されている。ここでは、認知症患者とその介護者を対象としたプログラム「Met Escapes」を視察した。プログラムは、エドゥケーターの案内で館内を歩き、絵画作品や、建物の入り口の装飾について対話を重ねた。会話を楽しむだけでなく、絵画制作をしたり、中庭のハーブに触って匂いを嗅いだり、さらには、作品人物と同じポーズを取ったり、音楽に合わせて体を動かしたりと、五感を使った鑑賞が行われた。同美術館では、患者と介護者両方に対してアンケートを行っており、プログラムの改善に役立てたり、ボランティアのはげみとしていたりしている。また、認知症患者とその介護者のためのQOL向上に特化した団体であるケアリングカインドを通じて、スタッフのトレーニングを行っている。★ 地下鉄A線、190丁目駅下車。徒歩約10分。



2019年10月17日(木) ニューヨーク

2. ホイットニー美術館 (インタビュー/ダイマ・シモンズ氏) ★ 地下鉄A/C/E/L線、14丁目駅下車。徒歩約10分。

3. イントレピッド海上航空宇宙博物館 (インタビュー/シャーロット・マーティン氏ほか)

1974年に退役した航空母艦イントレピッドを再利用した博物館。昨年インタビューで話を伺った認知症患者とその介護者のためのプログラム「Stories Within」を視察した。イントレピッドに関する様々な写真を題材に、エドゥケーターとボランティア、そして参加者が会話を交わしながら進められ、途中で写真を撮ったり、船内のベッドの素材に触ったり、様々な感覚を使った鑑賞が行われた。後半は別室でフォトフレームをつくる作業を行った。評価については、当日配布するアンケート以外に、参加者にメールのフィードバックや、フォーカスグループでのテスト、館外の専門家(ケアリングカインド等)にプログラムを視察してもらい、フィードバックをもらう等の方法をとっている。また、イントレピッドには評価担当のチームがあるので、聞き取りによる内部評価なども行っている。

★ 地下鉄A/C/E線 42丁目ポートオーソリティー駅下車。徒歩約20分



2019年10月18日(金) ニューヨーク

4. ルービン美術館 (インタビュー/ローラ・スローン氏)

ヒマラヤ地域の文化を紹介する美術館。認知症患者とその介護者を対象としたプログラムを視察した。この美術館ではプログラムが始まる30分前に美術館に到着することを勧めているのが特徴で、美術館に併設しているカフェでお茶とお菓子を、プログラム前の参加者に無料で提供している。集まった参加者は皆顔見知りも多くいるようで、会話も弾んでおり、認知症患者と介護者のコミュニティが形成されていた。

★ 地下鉄1線 18丁目駅下車。徒歩約2分



2019年10月21日(月) ニューヨーク

5. アメリカンフォークアート美術館

(インタビュー/レイチェル・ローゼン氏)

★ 地下鉄1線、66丁目リンカーンセンター駅下車。徒歩約1分。

6. メトロポリタン美術館

(インタビュー/アーツ・アンド・マインズ キャロリン・ハルピン・ヒーリー氏ほか) 認知症患者とその介護者を対象としたプログラムの、プログラム実施者向けの研修を受講した。研修は、メトロポリタン美術館の作品で実際にプログラムを受けたあと、資料をもとに、プログラムの進め方について学んだ。

★ 地下鉄4/5/6線、86丁目駅下車。徒歩約10分。



■ 米国調査のメンバー ■

中込 潤 (九州産業大学美術館)
藤田 千織 (東京国立博物館)

鬼本 佳代子 (福岡市美術館)
小栗 栖 まり子 (対馬市博物館)

「米国調査報告」

令和元年10月16日～10月21日にニューヨーク市内の博物館で調査を行った。

今回の主な目的は高齢者プログラムの視察と、プログラム評価の方法や医療機関等との連携についてインタビュー調査を行うことである。

以下、訪問した博物館のプログラム視察については、その様子を記し、インタビューについては、評価、参加者やスタッフの変化、参加者数、スタッフの育成、新たな取り組み等、項目ごとに記す。

1. メトロポリタン美術館クロイスターズ (プログラム視察・インタビュー)

【プログラム視察】Met Escapes(写真1)

メトロポリタン美術館別館のクロイスターズは、フランスから移築された修道院で構成された建物で、中世ヨーロッパの美術品が展示されている。

視察したプログラムは認知症を患った方とその介護者が対象で、この日は2組の参加があった。テーマは「ポータル」。入り口や扉をきっかけに鑑賞体験を行った。参加者は携帯用の椅子を持って、エドゥケーターの案内で館内を歩き、絵画作品や、建物の入り口の装飾について対話を重ねた。

対話の間に、絵画制作をしたり、中庭のハーブに触って匂いを嗅いだり、さらには、作品人物と同じポーズを取ったり、音楽に合わせて体を動かしたりと、五感を使った鑑賞を行った。参加者はリラックスして、時には冗談を飛ばしながら鑑賞を楽しんでいた。

【インタビュー】

Marie Clapot (Museum Educator, Accessibility)

1) 評価について

プログラムの評価は、アンケート方式をとっており、患者と介護者両方に対して行っている。これによりプログラムの改善に役立てたり、ボランティアのはげみとして行っている。

2) 参加者やスタッフの変化について

コロンビア大学の医学生が同様のプログラムに参加し、質問をしたところ、認知症患者に対する考え方、理解が深まり、前向きになったという結果がある。

3) 参加者数について

12年続けていることもあり、多くの参加者がある。しかし、ミュージアムは家族で来るところだと思っていない人や、言語が異なる人、博物館に来る文化のない人などの参加はない。多様な文化の新しいパートナーシップをつくるため、ブロンクスにある退役軍人病院にアウトリーチに行くなど、いくつものアウトリーチを実施している。

4) スタッフの育成について

メトロポリタン美術館のエドゥケーターは約70名。スタッフのトレーニングは、認知症の方とその介護者のためのQOL向上に特化した団体であるケアリングカインド(様々な文化機関とトレーニングを行っている)が行う。

5) プログラムについて

プログラムでは①探求心、②五感、③参加者主体という3つの要素を大事にしている。参加者の心地よさをとても大事にしており、イスに座って行うのもそうした理由である。また、耳の不自由な方のために、エドゥケーターの声を拾って、イヤホンで参加者に伝えるアシストデバイスなども準備している。

アクセスプログラムに関しては、自分の地域をリサーチして何に課題があるのか、よく知ることが大事である。また、どんな人も同じ体験ができるようになるためには、施設の整備など機能的な部分で担保できることは限られており、人を介したプログラムが重要になってくる。



写真1: プログラム Met Escapesの様子

12-1

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める
米・英国博物館との交流事業

2 ホイトニー美術館
(インタビュー)

【インタビュー】Dyeemah Simmons(写真2)
(Director of Access and Community Programs)

1) 評価について

担当者がプログラムを観察し、参加者の反応を見て、参加者から聞き取りを行ったり、エドゥケーターからのフィードバックを参考にしたりして質的な評価をしている。寄付、助成のあるプログラムに関して、その報告には参加者数など量的なものを提出している。

2) 参加者やスタッフの変化について

プログラムに参加すると同好の士が集うため、意見交換などが活発に行われ、参加者はよりクリエイティブになることができる。また同様のプログラムが他の美術館でも行われており、それらに参加することで、参加者同士のつながりが生まれている。

3) 新たな取り組みについて

現在、シニアセンターやコミュニティーセンターを協力してプログラムを実施しているが、そうしたところと関わりをもっていない高齢者は接する機会がない。今後、そうした人たちもカバーできるようなプログラムをやりたいと考えている。

4) 高齢者を対象としたプログラムについて

「アーティストのための美術館」であることが館のミッションでもあり、展示だけでなく、来館者とアーティスト

が出会う場を設けている。たとえば、インストラクターとしてアーティストを雇用し、高齢者を対象に無料のワークショップを行っている。地域のコミュニティーセンターと連携し、週1回、アーティストが訪ねて4～6週間かけて制作プログラムを行う。

その他、春と秋の年2回、シニアオープンアクセスデーというものを開催している。高齢者を広く招待して、クッキーやお茶を用意し、これまで会ったことがない人と出会い、いろいろな情報を得、つながりを広げる機会をつくっている。

高齢者に人気があるプログラムとして月1回実施している視覚障がい者対象のプログラムがある(写真3)。エドゥケーターが展示と作品を選び、言葉で説明して触るプログラムで、高齢者は視力も弱くなるためこうしたプログラムが人気である。触ることができる作品は少なく、保存専門の担当者や相談しながら作品を選ぶ。また、教育部門で、同じ素材を使ってそれに代わるものを作ったり、アーティスト達に頼んで作品のピースを提供してもらったりして、触るプログラム用の作品を準備する。

高齢者にとって居心地のいい場所を提供することや、同じ年代、違う年代の人と会うような場所をつくることなどが、ミュージアムとしてできること。そもそもミュージアムは歴史を保存する場所。高齢者から話を聞き、学び、保存し、分析することでこれからのことを考える材料にすることができる。

3 イントレピッド海上航空宇宙博物館
(プログラム視察、インタビュー)

【プログラム視察】Stories Within



写真2: インタビューの様子



写真3: 視覚障がい者対象のプログラム
Verbal Description and Touch Toursの様子

イントレピッド海上航空宇宙博物館は、退役した空母を利用した博物館である。

認知症を患った方とその介護者を対象としたプログラムを視察した。参加者は2組。博物館サイドのスタッフは、エドゥケーター1名とボランティア2名。イントレピッドの元乗組員とその妻がボランティアとして参加していた。このプログラムではイントレピッドに関する様々な写真を題材に、エドゥケーターとボランティア、そして参加者が会話を交わしながら進められた。はじめは携帯用のイスを持って、船内のかつて暗室があった場所へ移動し、用意した写真を見ながら、イントレピッドでの生活などについて語り合った。参加者が様々な質問をし、元乗組員がそれに答えていた。エドゥケーターも元乗組員に質問を投げかけ、会話を繋いでいた。さらに、イントレピッドが現役で動いていた頃につくられたアルバムや、船内で発行されたニュースレターの拡大コピーなどを出して、話題を提供していた。

その後、場所を移動しながら、当時の写真を見たり、展示物に触ったりして会話を重ねた(写真4)。エドゥケーターが参加者に投げかける質問は、「この写真に写っている人は何を感じていると思いますか? どうしてこの人たちの写真を撮ったと思いますか?」といった、自由に想像できる内容となっていた。

一通り展示を見た後、別の部屋に移り、紙製の写真入れを作った(写真5)。この日のプログラム中にポラロイドカメラで参加者の記念撮影した写真を飾るための写真入れである。用意された紙のフレームはほとんど加工が済んでおり、参加者はシールやペンでそのフレームを飾り付ける。患者は介護者のサポートを受けながら

シールを貼り付けたり、文字を書いたりして完成させていた。また、自分たちが写った写真を見ながら、患者と介護者が話をしていったのが印象的だった。

プログラムの最後に、この日やったことをまとめたプリントを配布し、元乗組員の話でプログラムを締めくくった。終了後にはプログラムの評価用のアンケートを配布し、介護者が患者に聞き取りをしながら答えてもらっていた。

【インタビュー】Charlotte Martin(写真6)
(Senior Manager of Access Initiatives)他

1) 評価について

当日配布するアンケート以外に、参加者にメールでのフィードバックや、フォーカスグループでのテスト、館外のエキスパート(ケアリングカインド等)にプログラムを観察してもらい、フィードバックをもらう等の方法をとっている。また、イントレピッドには評価担当のチームがあるので、聞き取りによる内部評価なども行っている。プログラムの内容の改善のほか、地域や、参加理由、年齢などニーズをつかむための分析も行っている。

2) プログラムについて

今回、プログラムの中で、元乗組員の方の役割が大きかったように思うが、実施される内容によっては元乗組員がいない場合もある。参加者だけでなく、ボランティアも高齢者だが、一度やると継続してやりたいという方が多い。また、高齢者向けのプログラムは今後拡大していく予定で、今回視察したプログラムを、館内だけでなく、地域の8つのシニアセンターで行っているが、来年



写真4: 船内のベッドの素材に触れる参加者



写真5: 写真のフレームをつくる参加者

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める
米国・英国博物館との交流事業

度はそれを12箇所を増やそうとしている。

プログラムの最後に配布したまとめのプリント(写真7)は、参加者の中には短期記憶が難しい患者もいるので、このプリントを使って思い出しの活動ができる。また、プログラムに参加できない家族が、後からどんなことがあったかを話すのに役立つといったことを期待している。

3) 医療機関等との連携について

子ども病院や、退役軍人用の病院に行ってプログラムを行っている。またニューヨーク大学の病院や、ケアリングカインド(認知症患者や介護者のケアを専門とする組織)を通じて、認知症患者とどう向き合うか、対処の仕方、思い込みの払しょくなどのプログラムでトレーニングをしたり、自分たちが行っているプログラムを観察してもらい助言をもらったりしている。

4) 電話を利用したプログラムについて

DOROT(ヘブライ語由来の言葉で“世代”という意味)という高齢化の課題に取り組む非営利組織が行っている「壁のない大学」というプログラムに、イントレピッドが参加している。これは、支援なしで家の外に出られない60歳以上の高齢者を対象としたプログラムで、家を出られなくても参加できるよう、事前に写真資料をパッケージしたもの送っておき、電話会議システムを利用して7~8人の参加者でやりとりしながら進める。この「壁のない大学」で、イントレピッドは、ロケット科学や、軍隊の女性参加、航空宇宙の話といったプログラムを提供している。

4 ルビン美術館
(プログラム視察、インタビュー)

【プログラム視察】Mindful Connections

ルビン美術館が行っている認知症患者と介護者を対象としたプログラムを視察した。この美術館ではプログラムが始まる30分前に美術館に到着することを勧めているのが特徴である。プログラム開始前に集まった参加者には、美術館に併設しているカフェでお茶とお菓子を無料で提供している(写真8)。参加者は皆顔見知りのようで、会話も弾んでいた。我々が視察したクロイスターズやイントレピッドのプログラムに参加していた方々の姿も見ることができ、介護者のコミュニティが構築されているようだった。

参加は無料だが、事前予約が必要で、事前に病状の進行度合いを考慮したグループ分け(初期段階のグループと病状が進んだグループの2グループ)がされていた。担当者によると、事前にグループ分けはしているが、その場に応じて変更することもあるという。場合によっては1グループにまとめることもある。

今回は病状が進んだグループを視察した(写真9)。携帯用のイスを持って作品の前に座ると、エドゥケーターがプログラムのテーマが「意図」であること伝え、作品の概要を説明した。参加者から「どこで作られたのか」「いつ頃描かれたのか」「描線について」など色々な意見や質問があり、それを話題に会話がなされた。しばらくすると、輪郭だけの顔の絵(話題としていた絵の輪郭のみの絵)が配られ、そこに顔を描きこむようにエドゥ

ケーターから話があり、介護者と患者で協力しながら描いていた。中には描かない患者もいたが、無理に描かせることはしない。

次の作品の前に移動後、参加者の一人が作品の前で「第一印象は注意をひく作品。ポジティブな感じがする」と発言すると、エドゥケーターから「具体的には?」とさらに質問を投げかけ、やり取りを繰り返すうちに、別の参加者からも様々な発言が生まれていた。

一通り絵について話したのち、エドゥケーターからの「どういう題名を付けますか?」という質問に、「渦」、「ヤマアらし」、「植物的」、「かたさや柔らかさを感じる」など様々な意見が出た。いくつものアイデアが出たところで、エドゥケーターは作品のタイトルが「UFO(写真10)」であることを明かし、普通は未確認飛行物体のことを言うが、この作品はUNIDENTIFIED FETTERING ORGANIZATION(未確認の拘束されている組織)の略で、色々なものに縛られているチベットの厳しい状況を描いた作品であると作品の意図を説明した。

最後に、参加者は作品「UFO」を参考に絵を描いてプログラムを終了した。

【インタビュー】

Laura Sloan(写真11)
(Manager of Docent & Access Programs)

1) 評価について

質問紙のアンケートや、ウェブを利用したアンケート

で意見を聞いたり、参加者にメールを送って感想を聞いたりしているほか、顔触れが決まっているプログラムに関しては、プログラムの中での会話の中で改善点などを聞き出すようにしている。

2) スタッフの育成について

プログラム実施者のトレーニングについては、ケアリングカインドを通してやっており、例えば認知症の高齢者の場合、名前を呼ぶと反応が良いため名札をつけるなど、このトレーニングで様々な知識を身に付けることができる。また、講座のほか、ケアリングカインドの資料を参考にして作ったレファレンスのバインダーを作成した。このバインダーを見れば、「こういうタイプの人 cameたら、どう対応したらいいか」などがすぐわかるようにした。

3) 新たな取り組みについて

今年から介護者専門のプログラムを始めた。これはケアリングカインドとパートナーシップを結んで行っているプログラムで、ケアリングカインドには、実施者のトレーニングや、受講者の紹介などをしてもらっている。

別の新たな取り組みとして、作品を言葉で説明するとともに触覚を使った鑑賞プログラムを実施している。このプログラムは作る側もクリエイティブに考えられて楽しい。現代作家の場合、失敗作などを提供してもらって触るプログラムに使ったりしている。

12-5



写真6: インタビューの様子

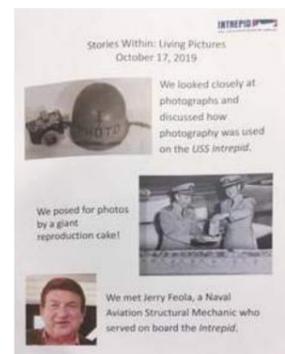


写真7:
プログラムで配布した
まとめのプリント

12-4



写真8: プログラム開始前の
参加者の様子



写真9: プログラム中の様子



写真10: 作品「UFO」を
鑑賞する参加者



写真11: インタビューの様子

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める 米国・英国博物館との交流事業

4) プログラムについて

「シニア向け」と「アクセシビリティ」を別々に運営している。「シニア向け」のプログラムには無料ツアーのほか、瞑想プログラムとライティングワークショップがある。瞑想プログラムは、ギャラリーでその日のテーマに関する2~3作品を見た後、シアターで作品について語り、瞑想するという内容。ライティングワークショップはスタッフの中に大学の先生がおり、その方が指導を務めている。課題を設け、30分間ギャラリーで作品を見て文章を書くというプログラムである。「アクセシビリティ」の方は、色々な障がいをもった方が対象。プログラムが始まる前にお茶菓子を用意しているのは、参加者の交流の機会をつくるためだけでなく、この美術館に来ること自体大変な方もおり、気持ちを整える時間を作るためでもある。

大体2グループに分けて、2つの同じ作品を交代で見られるようにしている。プログラムの中で、音、匂い、触感を使うなどするようにしている。今回のプログラムでは、自由な造形ができるワックスの棒を用意していたけれど時間がなくてできなかった。

プログラムの作品を選ぶ基準は、作品の大きさやイスを置くスペースなど物理的な環境を満たしているもので、どのようなストーリーが語れるかを大事にして選んでいる。また、参加者の感情に訴えかけるのに、どういった質問したらよいのかも考える。

5 アメリカンフォークアートミュージアム(写真12) (インタビュー)

【インタビュー】Rachel Rosen
(Director of Education)

1) 評価について

プログラムの評価の方法として、アンケートや観察がある。アンケートの内容の半分は自由回答で、半分はYes/Noで答える質問となっている。その結果をプログラムの改良に役立てている。また、年に2回ケアリングカインドに来てもらい、フォーマルな視点で観察してもらい、それをフィードバックしてもらうようにしている。

2) スタッフの育成について

はじめは、アルツハイマーアソシエーション、最近ではケアリングカインドで継続的に実施者のトレーニングを行っている。

3) 高齢者を対象としたプログラムについて

アメリカンフォークアートミュージアムは、他のミュージアムに比べて来場者の平均年齢が高く(60歳ぐらい)、高齢者対象と謳ってなくても、高齢者の多いプログラムとなる。11年に渡って月1回、「Meet Me at MoMA」というアルツハイマー病の患者とその介護者を対象としたプログラムをモデルとしたプログラム「フォークアートトリフレクション」をやっている。今年1月にメロン財団の助成が出たため、プログラムの規模を広げた。この「フォークアートトリフレクション」の特徴は、ものづくり、作品作りが入っておらず、主に会話を中心としているところである。参加者によっては認知症の症状の進行度が異なるため、エドゥケーターが様子を見ながら、全員が参加できるようなペースで進めている。11年間、活発にやってきたプログラムであり、同じ人、色々な人が顔を合わせ社交の場となっている。そうした機会を担保するため、1回のグループの数をあまり多くしないようにしている。

助成を受けて、これまで月1回だったプログラムを2回にした。コミュニティセンターから人が来るのは大変なので、セラピストのエドゥケーターを雇ってセンターに出かけるようにした。

また、年3回の音楽プログラムを行っている。認知機能の低下の中で、音楽の機能は最後まで残っているということが分かっているの、展示に合わせた音楽プログラムを実施している。

資金の問題で現在は行っていないが、中学校2年生の生徒たちと、施設に入っている認知症の高齢者を対象



写真12: 館内の様子

としたプログラムを1年以上続けていた。このプログラムでは、脳について勉強している中学2年生と認知症患者と一緒に作品をつくり、体験を共有するというもので、若い生徒にとっては、認知症に対する誤った社会通念を払拭する機会となり、高齢者にとっては若い世代との交流の場となる。

Verbal Descriptionという視覚障がい者を対象とした言葉によるプログラムを、展覧会毎に1回行っており、これは比喩の使い方などをトレーニングしたエドゥケーターが担当。言葉以外にも、触ったり、匂いを嗅いだり、音楽を聴くなどの要素もそのプログラムに取り入れている。認知症患者を対象としたプログラムの場合、エドゥケーターと参加者の関係作りは大切で、毎回違う人が行うわけにはいかない。一貫性を維持することを心掛けている。また、長く参加している人は認知症の症状が進行するので対応を変えていかなければならない。亡くなったと連絡を受けることもあり、エドゥケーターにとって、技術的にも感情的にも対応が難しい問題である。

4) 医療機関等との連携について

病院に行ってプログラムを行っている。認知症の初期段階で、家族がどうやって向き合ったらいいかというときに、こうしたプログラムは有効である。仲のいい病院の先生にプログラムの目的を伝えておき、そうした患者のいる家族に勧めてもらったりすることもある。

6 Arts&Minds (プログラム研修)

【プログラム研修】Carolyn Halpin-Healy
(Executive Director),

Nellie Escalante (Program Coordinator)

認知症患者と介護者を対象としたプログラム実施者向けの研修を受講した。研修は、メトロポリタン美術館の作品で実際にプログラムを受けたあと、それらについての解説が資料をもとになされた(写真13)。

プログラムの目的は、患者の認知的、身体的、社会的な刺激を得る機会を美術作品とつなげることで提供すること。さらに、介護パートナーの孤独感やストレスを、プログラムを通じて軽減することである。

プログラムは、前半に作品を見て解説し、後半に何かを制作して自分を表現するように構成されている。このプログラムの効果として、イギリスで実証されたデータが多くあるが、例えば、「自分の感情が良くなる」「無関

心さが減る」「プログラムを体験している最中は、認知機能が改善される」「介護パートナーの孤独感、ストレスが減る」といったことがあげられる。

参加者にとって、自由に意見を言えて、周りから尊重されたように感じたかが大事である。アートというのは発することで、人間の尊厳を知ることであり、それをこのプログラムで伝えられたらと考えている。

認知機能の低下という、論理的にものを考えようか、物事の判断をするとか、記憶するなどを考えがちだが、感情、美的なこと、音楽、視覚なども密接にかかわっていることも考える必要がある。

7) 調査を終えて

昨年度に続く今回の調査では、超高齢化社会における高齢者の健康と博物館の役割を探るとともに、実践的なプログラム開発へとつなげていくヒントを得ることができた。

ニューヨーク市内の博物館では、いくつもの館が認知症患者と介護者向けのプログラムを用意しており、複数の館がそれぞれの特徴あるコレクションを使って、共通のメソッドに従ったプログラムが、安定した質を保って実施されている。それが、いくつもの博物館をめぐって、繰り返し通う利用者を生むことにつながっているように感じた。また、繰り返し利用する人たちが増えることでコミュニティが生まれ、さらに生活の質の向上が促されている。高齢者の健康と博物館の役割を考えるうえで、モデルとすべき事例のひとつと考える。

報告者: 中込 潤 (九州産業大学美術館学芸室長)



写真13: 館内の様子

12-6

12-7

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める
米国・英国博物館との交流事業

■英国調査の日程

2019年11月2日(土) スコットランド・エジンバラ

1. 国立スコットランド美術館
2. ロイヤル・スコティッシュ・アカデミー
3. ジョージアンハウス
4. ピープルズ・ストーリー
5. エディンバラ博物館

国立スコットランド美術館とロイヤル・スコティッシュ・アカデミーは、スコットランドの首都であるエジンバラのメインターミナルであるウェイヴァリー駅近くに位置する。ロイヤル・スコティッシュ・アカデミーは頭文字をとってRSAの名称で親しまれ、同組織の国立スコットランド美術館のコレクションに加えて現代アート、建築などのテーマを扱う。スコットランドの現代アートを軸にしたRSAのコレクションのうち約2500点が、約30箇所のNHS(National Health Service)英国の国民保険サービス)のロージアン地方(エジンバラ近郊)の病院に展示されている。また、RSAのアートコンサルタントはNHSによる様々な地域の病院におけるアートアドバイザーでもある。



2019年11月3日(日) スコットランド・エジンバラ

6. スコットランド国立博物館

★ 1~6はスコットランド、エジンバラのウェイヴァリー駅周辺に位置し、それぞれ徒歩で5分~30分圏内である。

2019年11月4日(月) スコットランド・グラスゴー

7. ケルヴィン・グローブ美術館・博物館
8. グラスゴー大学付属ハンタリアン美術館・博物館

★ いずれもグラスゴー市内、地下鉄Kelvinhall駅から徒歩約15分。

2019年11月5日(火) ロンドン

9. ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー ①

(インタビュー/ジェーン・フィンドレー氏、ケリー・ロビンソン氏)

ジェーン氏と、主に高齢者プログラムを担当するコミュニティー・エンゲージメントのマネジャーのケリー氏に各種プログラムの詳細をインタビューした。

★ ロンドン市内から電車でNorth Dulwich駅まで約15分。下車後、徒歩約10分。またはBrixton駅から美術館前までバスも運行。



10. ベスレム ミュージアム オブ マインド

(Bethlem Museum of the Mind) (インタビュー/コリン・ゲール氏)

Bethlem Museum of the Mindは、ロンドン南部に位置するBethlem Royal Hospitalの入り口正面にある博物館である。精神疾患の患者と家族だけでなく、精神医学を学ぶ学生や一般にも広く公開されている。常設展示と企画展示室で構成されており、常設展示では様々な精神疾患について作品と共に紹介されている。NHSトラストによって資料の管理や運営がなされている。月曜日、火曜日はグループの訪問者を事前に受け付けており、水曜日から金曜日は一般公開されている。

★ ロンドン市内から電車でEden Park駅まで約1時間10分。下車後、徒歩約15分。



2019年11月6日(水) ロンドン

11. ウェルカム・コレクション (Wellcome Collection)

Wellcome Collectionは、ヘンリー・ウェルカム氏による医学、薬学、科学を主として民族学やアートによるコレクションで構成され、常設展示と企画展示を無料で公開している。教育プログラムも無料で参加でき、誰にでも開かれていることを第一にあげている。リラックスできるように工夫された図書館や、キッチン、ショップやカフェなどもあり、展示のみならず施設全体での体験が健康と、より良く生きるための多様な価値観に出会う機会を提供している。★ ロンドン市内、ユーストン駅のすぐ近く。

12. ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー ②

(インタビュー/ジェーン・フィンドレー氏、ケリー・ロビンソン氏、ルーシー・リベイロ氏)

実際に高齢者施設からの参加者による“Aging Well program”を見学。プログラム終了後、企画担当者のリベイロ氏と運営担当者のロビンソン氏にプログラム実施から評価までの詳細をインタビューした。



■英国調査のメンバー

松村 利規(福岡市博物館)
五月女 賢司(吹田市立博物館)

緒方 泉(九州産業大学)
吉田 公子(九州産業大学美術館)

「英国調査報告」

令和元年11月2日~ 11月6日に英国のスコットランド・エディンバラ、グラスゴー、そしてロンドン市内の博物館で調査を行った。

国立スコットランド博物館

11月3日調査 ○

国立スコットランド博物館(写真1)は、エディンバラ旧市街にあるスコットランド最大級の博物館。1985年、国立スコットランド古美術博物館がスコットランド王立博物館に統合され、2006年に現在の名称となった。

博物館は、旧王立博物館エリア(1888年完成、2011年リニューアル)とスコットランド博物館エリア(1998年新築)で構成される。前者はバルコニーに囲まれたグランドギャラリー(写真2)をハブとして、自然史、世界の文化、芸術・デザイン・ファッション、科学技術のギャラリーを持つ。後者は展示デザインと建築意匠が一体化した挑戦的なレイアウトでスコットランドの歴史文化を紹介している。収蔵品は約400万点を数え、世界初のクローン羊「ドリー」の剥製や、ルイス島のチェス駒、マッキントッシュの家具など、スコットランドを象徴する展示物も充実している。

ケルヴィングローブ美術館・博物館

11月4日調査 ○

ケルヴィングローブ美術館・博物館(写真3)は、グラスゴー西部にあるスコットランドを代表するミュージアムである。赤い砂岩を使用したバロック様式の建築(1901年完成、2006年リニューアル)は非常に印象的で、センターホールにはコンサート用のパイプオルガンが設置されている。

センターホールを挟んで、建物の東側が美術館、西側が博物館の機能を担っており、22のテーマに沿って8000点を超える作品・資料が展示されている。美術館側の展示のキーワードは表現(Expression)、博物館側は生命(Life)である。博物館側の展示には、自然史と人類史の資料を、テーマに沿って組み合わせた展示が随所にあるのは特筆すべき点である。例えば、動物の体型や器官の形状と人間が生み出した道具の形状の類似を、同じケースに並べて比較してみせる(写真4)など、大胆で野心的な試みが見られる。

ウェルカムコレクション

11月6日調査 ○

ウェルカム・コレクション(写真5)は、2007年にロンドンのユーストンに開館した博物館・図書館。イギリスの製薬企業家ヘンリー・ソロモン・ウェルカム(1853-1936)が収集した、世界の医学史に関連する道具・器具、絵画、書籍等の膨大なコレクションを収める。運営するウェルカム財団は、イギリス最大の研究慈善団体である。

展示は、医学や薬学、科学などを、アートやデザインを通して一般にも親しみやすい形で伝えている。常設展



写真1: 国立スコットランド博物館



写真2: グランドギャラリー



写真3: ケルヴィングローブ美術館・博物館



写真4: ギャラリー
"Conflict and Consequence"



写真5: ウェルカム・コレクション入口

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める
米国・英国博物館との交流事業

示 "Medicine Man" (写真6)では、ウェルカムの収集品、例えば、ナポレオンの歯ブラシやダーウィンの杖などが、非常にスマートに展示されている。また "Being Human" には、遺伝学、心と身体、感染、環境破壊という4つのテーマに沿って現代美術作品が展示されている。企画展のほかにも、読書室、レストラン、カフェ、ショップがたいへん充実している。

報告者:松村 利規 (福岡市博物館学芸課長)

ジョージアン・ハウス (写真7)

11月2日調査 ○

18世紀後半から19世紀初頭のエディンバラにおけるニュータウンの典型的な富豪邸宅としてスコットランド・ナショナル・トラストにより修復・公開された。初代所有者ラモント家の生活や使用人の仕事を通して、当時の社会・経済が理解できる。

まず、スタッフから簡単な邸宅の紹介をされ、概要紹介の映像が流れる最上階へと案内される。ツアーはなく、自分のペースで歩くことができる。各室内には、ボランティアガイド (写真8)が待機しているほか、日本語を含む各国語の解説文が用意されている。登録ボランティア約200人の多くが室内ガイドである。

囲い込みによって農地を奪われた小生産者が、工場

労働者などとしてエディンバラ (オールドタウン)に移り住んだため、城壁で囲まれていたオールドタウンの人口が過密し都市環境が悪化した。そのため、1760年代から隣接地にニュータウンが建設され、オールドタウンの富裕層や農地の地主・農業資本家らが移住した。

ピープルズ・ストーリー博物館 (写真9)

11月2日調査 ○

ピープルズ・ストーリー博物館は、エディンバラ博物館・美術館群の一つとしてエディンバラ市により1989年に設置された。1591年建設のキャノンゲート・トルブースという建物が使われている。1984年のエディンバラ市議会議員選挙で勝利した労働党の公約が、労働者と労働組合の歴史博物館を設置することだった。開館準備の際は、エディンバラ市民が過去の記憶をスタッフと共有し、展示制作にも関与し、日常生活で使用していたものを寄贈した。こうした彼らの記憶、経験、資料の共有があってこそ、同館は本当の意味でピープルズ・ストーリーの語りの場になったと言える。

展示は、オーラル・ヒストリー、回想、史料に基づいた構成となっており、エディンバラに住み、働いた人々の日常生活と経験を通して、18世紀から20世紀末までの労働者階級の社会史を知ることができる。館内の登場人

物はすべて実在したエディンバラの人々であり、彼らの言葉が展示の至る所に見られる (写真10)。

エディンバラ博物館 (写真11)

11月2日調査 ○

エディンバラ博物館は、エディンバラ博物館・美術館群 (エディンバラ市内の13館と200以上の記念碑を管理運営)の一つとしてエディンバラ市により設置・運営されている。16世紀後半建設のハントリー・ハウスという建物が使われており、ピープルズ・ストーリー博物館にもほど近い。老若男女、地元客、観光客などすべての人が対象だが、ピープルズ・ストーリー博物館同様、古建築を使用しているためエレベーターが設置できず、階段のみとなっている。また、館内は薄暗く、弱視などの来館者には見えづらい展示も多い。これらについては、HPで明確に理由と現状の詳細な説明を文字、手話、館内の写真などで示しており、透明性を確保し説明責任を果たしていると言える。

同館には、エディンバラに関する歴史資料が収蔵されている。館内には、ジェームス・クレイグによるニュータウン設計図、第一次世界大戦の陸軍司令部の再現、職人による装飾芸術など展示されている (写真12)。

報告者:五月女 賢司 (吹田市立博物館学芸員)

国立スコットランド美術館

11月2日調査 ○

ロイヤル・スコティッシュ・アカデミー

11月2日調査 ○

国立スコットランド美術館とロイヤル・スコティッシュ・アカデミーは、スコットランドの首都であるエジンバラのメインターミナルであるウェイヴァリー駅近くに位置す

る。両館の入り口はそれぞれ設けてあるが、同一の敷地内にあり、前庭より地下を通じて両館共通のレストランやミュージアム・ショップを利用しながら、相互に行き来できる構造となっている。ミュージアム・ショップやカフェは地下だけでなく、各館にも設けられている。国立スコットランド美術館とロイヤル・スコティッシュ・アカデミーは近隣の他のSCOTTISH NATIONAL PORTRAIT GALLERY と、SCOTTISH NATIONAL GALLERY OF MODERN ART と合わせてNATIONAL GALLERIES SCOTLANDの組織にあり、利用者のために、連絡バスでこれら3箇所が連携している (運賃は1ポンドの寄付)。

国立スコットランド美術館 (写真13)について印象に残った点を2点取り上げたい。1点目は、展示室内に作られたミュージアム・ショップである。展示室は1階に10の小テーマによる展示コーナーがあり、2階に1階の約20%の面積に3つの小テーマの展示コーナーがある。

ミュージアム・ショップ (写真14)は1階の3つ目の展示コーナーに1店舗のみある。展示空間に併設するにあたり、作品の鑑賞を妨げないように工夫されていた。展示空間に圧迫感を生じさせず、視界を遮らないように、商品の棚は高さが約100cmであった。また棚は周囲を回って商品を手にとることができる。商品の並べ方と棚の仕様が調和しており、展示室との親和性が感じられた。展示されている作品に関連する資料やグッズがすぐに手に取れることによって、利用者の購買欲へ繋がる効果的な方法である。2点目は、自らの館の活動の目的と計画について社会に向けて明確に提示していることである。国立スコットランド美術館は、見学当時は一部の展示室が閉鎖されており、2021年に向けて改修工事が行われていた。展示室では作品が展示されている壁面の



写真6: 常設展示 "Medicine Man"



写真7: ジョージアン・ハウス



写真8: ボランティアガイド



写真9: ピープルズ・ストーリー博物館



写真10: ピープルズ・ストーリー博物館



写真11: エディンバラ博物館



写真12: 歴史資料の展示



写真13: 国立スコットランド美術館



写真14: ミュージアム・ショップ

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める 米国・英国博物館との交流事業

グラフィックに、2021年にどのように生まれ変わるのか、利用者に期待を持たせるように語りかけている。

ロイヤル・スコティッシュ・アカデミー(写真15)は、頭文字をとってRSAの名称で親しまれている。展示は、主に国際的な企画展であり、国立スコットランド美術館のコレクションに加えて現代アート、建築などのテーマを扱う。興味深いのは、スコットランドの現代アートを軸にしたRSAのコレクションのうち約2500点が、約30箇所のNHS(National Health Service英国の国民保険サービス)のロージアン地方(エジンバラ近郊)に展示されていること。また、RSAのアートコンサルタントはNHSによる様々な地域の病院におけるアートアドバイザーでもあるという。

グラスゴー大学ハンタリアン博物館

11月3日調査 ○

グラスゴー大学ハンタリアン美術館

11月3日調査 ○

グラスゴー大学は1451年に設立され、ジェームズ・ワットやウィリアム・トムソンなど歴史的に著名な科学者、また多くのノーベル賞受賞者を輩出する名門大学である。学部は人文学部、医学・獣医学・生命科学部、理工学部、社会学部など多岐にわたる。グラスゴー大学ハンタリアン博物館とハンタリアン美術館は、マッキントッシュハウス(Mackintosh House)と共にグラスゴー大学が有する主な博物館であり、同敷地内に一般公開されている。他に学内にハンタリアン動物学博物館や解剖学博

物館などもある。グラスゴー大学ハンタリアン博物館(写真16)は、医師であったウィリアム・ハンターによるコレクションがベースになっている。1階では考古学、古生物学、地質学、昆虫学、民族誌学などの常設展示と企画展示コーナーがあり、2階には医学とウィリアム・トムソン(ロード・ケルビン)に関する科学の常設展示(写真17)があった。ケルビンについての展示では、ケルビンがグラスゴー大学出身であり、教員のキャリアがグラスゴー大学に始まり、晩年にはグラスゴー大学総長を務めた背景より、グラスゴー大学ならではの貴重な実験器具や手記などの歴史的な資料を用いて、実験の開発のプロセスと教授法を分かりやすい見出しで伝えていた。

ハンタリアン美術館(写真18)は、レンブラント、ルーベンスなど古典的な油彩画から、近代の作家であるジェームズ・マクニール・ホイッスラー、チャールズ・レニー・マッキントッシュまで幅広いコレクションを収蔵する。常設展示では、「肖像画」、「練習とプロセス(テクニックと素材)」などのテーマで構成されており、芸術系の学生への教材としても活用されている(写真19)。企画展示では、見学时、グラスゴー大学のアーカイブとコレクションによる「GUGA」が開催中。ゲール人の文化の歴史的な認識や広がり、現代のスコットランドにおいてどのような意味を持つのか投げかけられている。コレクションについて調査・研究活動の蓄積が公開されており、大学美術館の特性がうかがえた。

報告者: 吉田 公子(九州産業大学美術館准教授)



写真15: ロイヤル・スコティッシュ・アカデミー



写真16: グラスゴー大学ハンタリアン博物館



写真17: ウィリアム・トムソン科学の常設展示



写真18: グラスゴー大学ハンタリアン美術館



写真19: グラスゴー大学ハンタリアン美術館

12-11

米国・英国博物館関係者等を招聘した 国際シンポジウム事業

■ タイトル

「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」

■ 開催日時

2020年2月26日(水) 10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

九州産業大学グローバルプラザ
(福岡県福岡市東区松香台2-3-1 2号館1階)

■ 内容

【司会】吉田 公子(九州産業大学美術館准教授)

10:00 開会挨拶 10:10 講演1「英国における高齢者に向けた博物館教育の事例と評価の方法-ロンドン・ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー-」ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー/ヘッド・オブ・ラーニング/ジェーン・フィンドレー(Jane Findlay) 11:00 講演2「米国における高齢者に向けた博物館教育の事例と評価の方法-ニューヨーク・Arts & Minds-」Arts & Minds/エグゼクティブ・ディレクター/キャロリン・ハルピン・ヒーリー(Carolyn Halpin-Healy) 11:45 付箋紙に感想をまとめる 11:50 昼食 12:50 シンポジウム趣旨説明 緒方泉(九州産業大学地域共創学部教授) 13:10 報告「英国の博物館教育プログラム-ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの視察報告-」 13:30 報告「米国の博物館教育プログラム-Arts & Minds等の視察報告」 13:50 付箋紙に感想や気づきをまとめ、壁に貼りだす 14:15 休憩・付箋紙見学(コーヒープレイク) 14:40 シンポジウム「博物館教育プログラムの評価方法を英国・米国の事例から考える」パネリスト:ジェーン・フィンドレー/キャロリン・ハルピン・ヒーリー、指定討論者:中込 潤(九州産業大学美術館)/吉田 公子、モデレーター:緒方 泉 16:05 休憩 16:15 質疑応答 16:50 登壇者から一言 17:00 終了

■ 受講者数

22名(大分9名、福岡5名、佐賀2名、山口1名、大阪2名、東京3名)

■ 事後アンケート

以下の1~4について、感想(気づきや発見、気になった

キーワードなど)をお聞かせください。

質問1

ジェーン・フィンドレー氏の講演に関する感想

●英国で広まっている社会的処方(social prescribing)に関する動向や、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーが取り組んでいるエイジング・ウェルプログラムに興味をひかれました。英国保健省が音頭を取って進めていることや、4月にアートのプログラムを最初から織り込んでいるTessa Jowell Health Centreが設立されることなど、発見の多いご報告で、この分野において英国がすすんでいることを理解しました。後のパネルディスカッションで詳しく紹介された評価シート(の数々)は、これからの私にとって大いに参考になるものでした(大きな関心を持ちました)。リンクワーカーの役割の重要性も認識しました。

●医療従事者とミュージアムをつなぐリンクワーカーの存在に興味を持ちました。アートありきではなく、選択肢の一つとして美術館が含まれることは参加者にとってもメリットですが、美術館関係者も他分野を知る機会になると思います。また、実践に伴う分析をきちんと行っており、インフォーマルな評価方法で誰もが答えやすい状況を作るのも重要だと思いました。

●博物館と公的医療・介護機関の連携で高齢者が積極的に社会参加できる場を提供されていることにとっても感動しました。

特に評価手法は今後自分たちで企画を練る際には大変役立つと思います。早速UCL Museum Wellbeing Measures Toolkit を入手することができましたので、今後さらに勉強していきます。

●冒頭に掲げられた館の「ミッション」が印象的。現在自館もミッションの策定中だが、このミッションがスタッフに浸透していないと「なぜ高齢者の事業をやるのか」という点が曖昧になると感じた。

●館のコレクションや企画展の状況、成立の背景、運営主体、立地、スタッフ構成、などでプログラムの設計が異なってくる。ダリッチを例に、自館はどうするかと考えたい。



ジェーン・フィンドレー氏の基調講演①



ジェーン・フィンドレー氏の基調講演②

13-1

米国・英国博物館関係者等を招聘した 国際シンポジウム事業

- ①気になったキーワード:「ホリスティックなアプローチ」「リンクワーカー」「エンゲージメント」「Aging Well」②気づきや発見:「エンゲージメントスケールの活用」「ローカルな強みを広げていく重要性」
- 医療従事者との共同は、現在の日本にはまだ見られない活動の具体例を開けたことがよかった。
- 6歳～100歳までのプログラムを用意しているということに驚かされた、時間があれば具体的な内容を聞きたかった。
- Well-being(幸福感と解釈しました)がキーポイントとなっていること、評価までがひとつのプログラムとして組み込まれていることも重要であると思った。
- アンブレラシートで質的データが容易に測れるところが目からウロコだった。

質問2

キャロリン・ハルピン・ヒーラー氏の講演に関する感想

- (家族に認知症患者を持つ私にとって)認知症患者と介護パートナーに対する博物館プログラムについて知ることができて良かったです。英国ほどしっかり体系づけられていないといっても、複数の博物館や諸機関、大学付属病院による非営利ネットワーク(Arts & Minds)が存在することは大変関心を抱きました(我が国ではこちらの取組は参考になりそう、と感じました)。また、care partnerとcaregiverは微妙に違う、というお話も印象に残りました。Arts & Mindsにおける評価に対する取組も参考になりました。
- 患者ではなく参加者として個々人と向き合い、事前ニーズの把握から個人に寄り添っている印象を受けました。繰り返し参加してもらうことを強調していましたが、ケアする人のケアは医療のほか福祉などの分野でも「誰一人取りこぼさない」ために必要なことだと思います。
- 認知症の治療にも有効であることはこれらの活動を推進する上でとても励みになると思いました。介護者の苦労をよく耳にはしますが、博物館などを活用した「回想法」が状況の改善に役立つ可能性があるということなので、地域活性化企画と合わせてどのようなことができるのか、さらに調

査・企画を検討していくきっかけになると思います。

- 「医師/大学と組む」というアイデアを感じた。熊本大学や医療系大学とユニークな出会いをしてみたい。志のある人との出会いは大事。いくつか、そういうパートナーの顔が浮かんできた。
- ①気になったキーワード:「caregiver」「創造性」②気づきや発見:「医学とアートによる多様なプログラムの創出」「持続性をもつ取り組みの重要性」
- 日本にもARDAのようにアーティストと高齢者を結びつけるための団体(高齢者施設におけるアートプログラム実施)などはあるが、大学付属病院と共同で博物館プログラムなどを提供している団体はおそらくなく、貴重な事例を聞くことができた。
- 対象を認知症が見られる方々に明確に限定してプログラムを開発している点が興味深かった。

質問3

吉田 公子氏の英国視察報告に関する感想

- ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーが取り組んでいるエイジング・ウェルプログラムの進め方(企画→実施→評価の具体的な流れ)に関してより理解が深まりました。ロンドン大学開発のアンブレラシートは有用であると強く感じました。ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーのプログラムに関わったアーティスト名簿から選択するなど、システムに関心をもちました。
- 「お茶の時間」の大事さ。高齢者アートバスを実施した際も無意識にお茶を出していたが、ここは結構大事なポイントだと思った。実はこの「お茶の時間」のために、ミュージアムのプログラムはあるのではないか。
- 9ヶ月前から準備をし、事後評価まで行うことで、単発で終わらないような質の担保がされていると感じました。顔が見える席の配置やお茶・休憩の時間を設けるなど、安心して参加できる構成だと思いました。
- ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーで実際に行なわれている様子を客観的に分かり易くレポートしていただいた(レ

ンプラントの版画)。

- 進めていく上では、スタッフの声かけ次第で良くも悪くもなることが分かった。

質問4

中込 潤氏の米国視察報告に関する感想

- イントレピッド会場航空宇宙博物館の取組(STORIES WITHIN)に関心を抱きました。取組に参加できない家族が何をやったか理解できるよう、当日の内容をまとめたプリントを最後に配布するのは効果的と感じました。メトロポリタン美術館がオブザーバーの評価フォームをつくっていたのも発見になりました。ケアリングカインドやミュージアムアクセスコンソーシアムの存在(取組)も大変興味深く拝聴しました。
- 写真の多いプログラム報告が良かった。METのツアーでの植物を見る→自館にも花壇があるのでもっと活用できないか?ハーブを植えたり、五感に訴えたりする等。体を動かして作品をみる等のアイデア。
- 写真やレジュメなど、帰ってからどんな活動をやっていたかを家族などに波及させるアイテムの重要性など。
- Arts & Mindsのほかにも複数のプロジェクトが実施されており、アメリカの社会全体での意識が窺えました。プログラムの最後にこの日の内容をまとめたプリントを配布するなど、家に帰ったあとのことまでフォローし、ミュージアムでの体験と実生活がつながる仕組みに関心をもちました。
- Arts&Mindsが複数の館とどのように連携しているのか知ることができた。アンケートの具体的な質問事項などがよくわかった。
- 直後だけでなく後日の体験者の変化も追跡調査している点が重要だと思った。

質問5

今回のシンポジウムをもとに、今後自分たちの活動で取り組んでみたいこと

- 博物館における健康(医学、保健分野)と芸術による多

様なプログラムの検討

- 創造性、制作という視点からのプログラム(アイデア)の創出
- エンゲージメントスケール等を美術作品と音楽との関りにおいて活用すること
- 健康とアートによるアクティビティのエビデンスについての研究
- 今回、同じ地域に住む医療関係者の方と知り合いになれたのは大きな収穫でした。まずは個人的なつながりから、分野を超えて息の長い交流をしていきたいと思っています。
- 医療機関とは簡単には連携できないが、高齢者を対象にしたアートプロジェクトなど、まずできるところから始めたいと思った。
- アンブレラシートが活用できる機会を作って、実践してみたいと思った。
- 当館は任期を設けずにボランティア活動を行っており、80代以上の方も多し。70代、80代の方々にサポートの対象としてでなく、スタッフとして自然に活躍していただいていることも、館からのWell-being提供の場作りとしてのひとつの形ではないかと思った。
- 緒方さんのご報告内容にございました「フレイル」というステージ(3つのフレイル要因やイレブンチェックも含む)に大きな関心をもちました。我が国の博物館が、「プレフレイル」「フレイル」の方々のためにどのような役割が果たせるのか、引き続き関心を持って情報や取組を追いしたいと思います。施設づくりやコンサルティングを行うメンバーに対して、このような新しい観点(博物館と医療・福祉の関係/博物館健康ステーションづくり)が進んでいることを各場面で伝えたいと思います。

13-2



キャロリン・ハルピン・ヒーラーの基調講演①



キャロリン・ハルピン・ヒーラーの基調講演②



吉田 公子氏の英国視察報告



中込 潤氏の米国視察報告



国際シンポジウム全景

日本の博物館における高齢者向け教育プログラム悉皆調査事業

昨年度は、「2025年問題」解決に向けた「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」構築のために、九州・沖縄地域の博物館が行う高齢者対応策及び高齢者向け教育プログラムの実態把握を目的に、アンケート調査を実施した。今年度は、その結果を受けて、先進事例実施館の悉皆調査を行なった。

「文化芸術推進基本計画(第1期)」(2018年)を見ると、博物館、美術館について、「教育機関・福祉機関・医療機関等の関係団体と連携して様々な社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている」と提言している。

本事業の研究テーマが「博物館と健康」であるため、悉皆調査では「2025年問題」「健康寿命」「フレイル」というキーワードに留意した。

1947年から1949年生まれた人々、団塊世代と呼ばれる人たちが75才以上の後期高齢者となる2025年を目途に、要介護状態になっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれている。

日本の平均寿命は男性が80.98歳、女性が87.14歳。それに対し、自立して生活が送れる期間、つまり「健康寿命」は男性が72.14歳、女性が74.79歳になり、平均寿命より男性が約9年、女性が約12年短いことが分かる。高齢者は概ね、健康な高齢者、虚弱な高齢者、要介護な高齢者を経て、天寿を全うする。

現在、健康と要介護との中間の時期に位置する虚弱な高齢者は、筋力や心身の活力が低下する段階という意

味から「フレイル」と呼ばれている。健康寿命を引き延ばすには、この「フレイル」段階に適切な介入があると、健康状態に戻すこともできると言われている。

高齢者の元気の秘訣は3つ。1に体操、運動2に食事、栄養、そして3に社会参加。

最近の研究動向では、ロンドン大学1)やWHOヨーロッパ委員会2)などから、2019年に「芸術が健康に与える影響」を考えるための重要なレポートも出ている。

今回の悉皆調査で視察した、宮崎県総合博物館展示解説員による「博物館で思い出を語ろう」、宮崎県総合博物館民家園ボランティアによる「囲炉裏を囲んで昔話を聞いてみませんか」、NPO法人うらおそい歴史ガイド友の会による「沖縄県浦添グスク・ようどれ館解説活動」などは、高齢者の運動、社会参加に寄与するものとなっていた。つまり、博物館は高齢者の健康寿命の引き伸ばしに寄与できるという好事例であった。

次年度は、「健康寿命の引き伸ばし」のエビデンスを得るために、医療・福祉機関と連携し、「コルチゾールによるストレス反応検査」等の実証実験も取り入れていきたい。

*参考文献

- 1) Daisy Fancourt他「The art of life and death: 14 year follow-up analyses of associations between arts engagement and mortality in the English Longitudinal Study of Ageing」BMJ誌電子版,2019
- 2) WHO(World Health Organization) Europe「What is the evidence on the role of the arts in improving health and well-being? A scoping review」2019

14



宮崎県総合博物館展示解説員による「回想法」



宮崎県総合博物館民家園ボランティアの活動風景

今年度の印刷物



学芸員技術研修会広報用チラシ(A3版二折)



連続講座広報用チラシ(A4版)



国際シンポジウム広報用チラシ(A4版)



国際シンポジウム資料集(12ページ、A4版)



文化庁事業中間報告会用チラシ(11月8日開催、A4版)

15